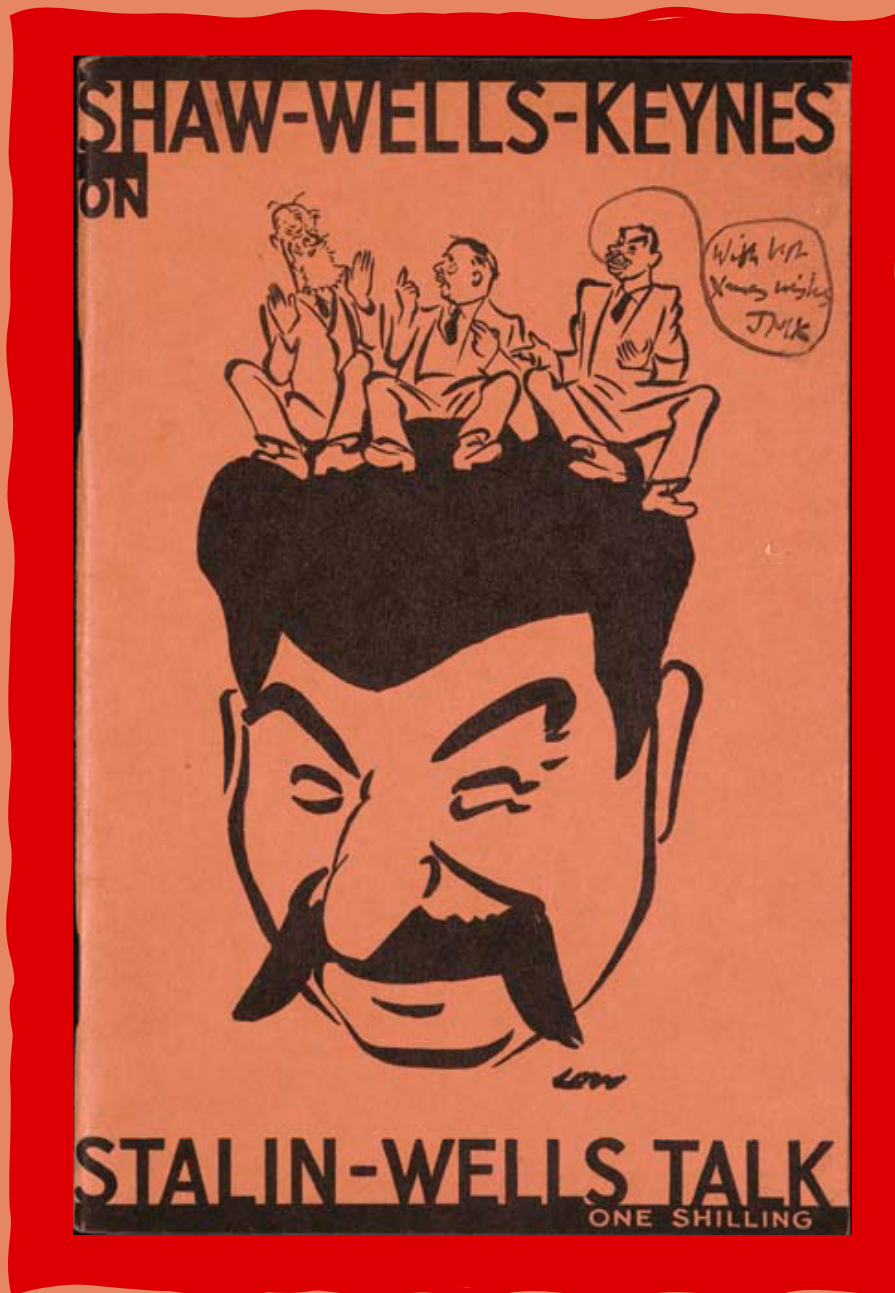


ヨシフ・スターリン H・G・ウェルズ

ジョージ・バーナード・ショー ジョン・メイナード・ケインズ
エルンスト・トラウ 他

スターリン＝ウェルズ対談をめぐって

(1934)



山形浩生 訳

[クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス](#) : クレジットを明記する限り、共有・翻案を自由に行っている。

スターリン＝ウェルズ対談をめぐって Stalin-Wells Talk (1934)

ヨシフ・スターリン、H・G・ウェルズ、バーナード・ショー、J・M・ケインズ、E・トラー ^{*1}
訳：山形浩生^{*2}

2021 年 2 月 9 日

^{*1} 著作権消滅

^{*2} ©2021 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>) 禁有断転載、有断複製。

目次

第1章	序文	1
第2章	スターリンとウェルズの会話：ありのままの記録	3
第3章	ロシアにおける自由について	17
第4章	議論	19
4.1	バーナード・ショー氏のコメント	19
4.2	エルンスト・トラー氏のコメント	24
4.3	ケインズ氏がショー氏に応える	26
4.4	ウェルズ氏が答える	29
4.5	G・B・ショーが続ける	31
4.6	さらなるコメント：本誌への投書	33
訳者あとがき		41
4.7	発端：スターリンとウェルズの対談	41
4.8	対談を巡る論争の概要	42
4.9	結局まとめると……	45
4.10	おまけ	45

第 1 章

序文

[1934 年の] 10 月 27 日に、『ニュー・ステイツマン・アンド・ネーション』は、H・G・ウェルズが最近モスクワを訪ねた時に行われた、スターリンとウェルズの会話をそのまま再現した。だれもが興味をおぼえた。その一部は、これほど傑出した人物二人の視点の衝突は、それ自体がわくわくするものだからだ。そしてさらには、彼らの会話で提起された問題が、西欧のわれわれ全員にとって、きわめて深遠な重要性を持つものだからだ。「階級闘争」とは何を意味するのか？ 新しい技術階級の発達により、古い定義はどこまで改変されねばならないのか？ マルクスは基本的には正しかったのか、それともはや古びてしまった頭痛の種でしかないのか？ 共産主義ロシアには知的な自由がどれだけあるのか、そしてソヴィエトの作家たちは、西欧の作家たちとものと密接なつながりを持てるのか？ こうした問題が、『ニュー・ステイツマン・アンド・ネーション』の月号にわたり、バーナード・ショー氏、J・M・ケインズ氏、H・G・ウェルズ氏、エルンスト・トラー氏、その他投書子により激しく採りあげられた。スターリンとウェルズの最初の会話、それに続く論説、その後の投書におけるハイライトのいくつかを、このパンフレットに採録する。



偉大なる同志スターリン閣下

第2章

スターリンとウェルズの会話：ありのままの記録

ウェルズ：スターリンさん、面会に同意していただいて、おおいに感謝しております。最近私はアメリカにおりました。そしてルーズベルト大統領と長い会話をして、彼の主要な考えがどのようなものかを見極めようと思いました。さて今度、私はあなたのもとにやってきて、世界を変えるためにあなたが何を……

スターリン：大したことはしておりません。

ウェルズ：私は一般人として世界をまわり、一般人として身の回りで何が起きているかを観察するのです。

スターリン：あなたのような重要な公人は「一般人」なんかではありません。もちろん、あれやこれやの公人がどれほど重要だったかを示せるのは歴史だけです。が何はともあれ、あなたは「一般人」として世界を見ているのではありませんよ。

ウェルズ：謙遜を気取ったわけではありません。言いたいのは、私が世界を一般人の目を通して観ようとするのであって、政党政治家や特定の役職に就いた行政官として見るのではないということです。アメリカを訪問して心が騒ぎました。古き金融世界は崩壊しつつあります。同国の経済生活は、新しい路線で再編されつつあります。レーニンはこう言いました。「我々はビジネスを学ばねばならない、それは資本主義者たちから学ぼう」

今日、資本主義者たちはあなたから学び、社会主義の精神をつかまねばなりません。アメリカで起こっているのは深遠な再編であり、計画経済、つまり社会主義経済の創造に思えるのです。あなたとルーズベルトは、出発点がまったくちがう。でもモスクワとワシントンの間には、思想の関係性、思想の親和性があるのではないのでしょうか。ワシントンで私は、ここで行われているのと同じことを目の当たりにして驚きました。部局を作り、各種の国家規制機関を作り、長きにわたり必要とされてきた公共サービスを組織しております。彼らが必要としているのは、あなたたちと同じく、社会を導く能力なのです。

アメリカとロシア

スターリン：アメリカは、我々がソヴィエト社会主義連邦で追及しているのとはちがうものを目指しています。

アメリカ人たちが目指している狙いは、経済的なトラブル、経済危機から生じたものです。アメリカ人たちは、民間資本主義活動を基盤に危機を排除しようとしておりますが、経済基盤を変えようとはしておりません。既存経済システムが引き起こした荒廃、損失を最小限に減らそうとしておるのです。しかしここではご存じの通り、古い破壊された経済基盤の代わりに、まったくちがう新しい経済基盤が創り出されたのです。あなたのおっしゃるアメリカ人たちが、部分的にせよその狙いを達成したとしても、つまりそうした損失を最低限に減らしたとしても、既存の資本主義システムに内在するアナーキーの根っこは破壊できません。彼らが温存しようとしている経済システムは、不可避免的に生産におけるアナーキーにつながり、それを避けることはできないのです。したがってそれはせいぜいが、社会の再編ではなく、アナーキーや危機を引き起こす古い社会システムの廃止でもなく、その過剰な部分を多少制限するような話にしかありません。主観的には、そうしたアメリカ人たちは自分が社会を再編しているつもりなのかもしれません。しかし客観的には、社会の現在の基盤を温存しておるのです。

ですから、客観的に見れば社会再編は起こらないのです。また計画経済も起こりません。計画経済とは何か？ その属性にはどんなものがあるのか？ 計画経済は失業を廃止しようとし、資本主義体制を温存したまま、失業をある最低限の水準に減らせることが可能だとしましょう。

しかしまちがいなく、どんな資本家も失業の完全な廃止には同意しません。失業者の予備軍を廃止したりはしないでしょう。その予備軍の目的は労働市場に圧力をかけ、安い労働力の供給を確保することなのです。ここにブルジョワ社会における「計画経済」のレントの一つがあります。さらに、計画経済は大量の人々が必要とする財を生産する産業部門において、産出が増えると想定しています。しかし資本主義の下での生産拡大はまったくちがった動機で生じ、資本は利潤率が高い経済部門に流れ込むことは、あなたもご存じでしょう。資本家に、人々のニーズを満たすため損をして低い利潤率に合意させることはできません。資本家を始末し、生産手段における私有財産の原理を廃止しない限り、計画経済を創り出すのは不可能なのです。

ウェルズ：いまおっしゃったことにほぼ同意します。

しかし、もし国全体が計画経済の原理を採用したら、もし政府が徐々に、一歩ずつ、一貫してこの原理を適用しはじめたら、金融寡頭支配はいずれ廃止され、アングロサクソンの意味での社会主義がもたらされるという点は強調しておきたい。ルーズベルトの「ニューディール」の発想の影響はきわめて強いものであり、私の意見では社会主義的なアイデアです。この二つの世界の対立を強調するかわりに、現状では建設的な勢力すべてについて共通の表現を確立するよう努力すべきではないかと思えるのです。

スターリン：計画経済の原理を、資本主義の経済基盤を温存した状態で実現するのは不可能だという話において、ルーズベルトの傑出した個人的資質、その努力、勇気、決意をいささかも矮小化するつもりはありません。ルーズベルトはまちがいなく、現代資本主義社会における船長たちの中で、最も力強い人物として抜きん出ております。だからこそ私は改めて、計画経済は資本主義の条件下では不可能だという私の主張が、ルーズベルト大統領の個人的な能力や才能や勇気を、何ら疑問視するものではないことを強調しておきたい。しかし不利な状況下では、最も才能ある船長ですら、あなたのおっしゃる目標には到達できないのです。

もちろん理論的には、資本主義の条件下で次第に一步步、アングロサクソンの意味合いでの社会主義とおっしゃるものという目標に向かって行進する可能性は、排除されるわけではありません。

しかしその「社会主義」とはどんなものになるのでしょうか？ せいぜいが、最も放埒な資本主義利潤の個人的な代表をある程度押さえ、国の経済における統制の原理適用を多少増やす程度でしょう。それはそれで大変結構です。しかしルーズベルトや、その他現代ブルジョワ世界のどんな船長であれ、資本主義の基盤に対して何か深刻な変化を加えようとしたら、まちがいなく全面的な敗北を喫するでしょう。銀行、産業、大企業、大農家はルーズベルトの手中にはありません。これらすべては私有財産です。鉄道、商船艦隊、すべて民間所有者のものです。そして高技能労働者の群れ、エンジニアたち、技術者たち、そうした人々もルーズベルトの命令に従うものではなく、民間所有者のために働いています。ブルジョワ世界における国家の機能を忘れてはいけませんぞ。

国家は、国防をまとめ、「秩序」の維持を組織する機関です。徴税の道具です。資本主義国家は、厳密な意味で経済とはあまり関わりません。経済は国家の手中にはないのです。それどころか、国家のほうが資本主義経済の手中にあるのです。だからこそ、あれだけのエネルギーや能力を持ってはいても、ルーズベルトはあなたのおっしゃる目標を実現できないのではと恐れるのです。それがそもそも彼の目標であればの話ですがね。ひょっとすると、何世代かたつうちに、この目標に多少は近づけるかもしれません。しかし個人的には、それすらあまり可能性が高いとは思いません。

ウェルズ：おそらく私は、あなたよりは政治の経済的解釈をもっと強く信じているでしょうね。発明と現代科学を通じ、よりよい組織に向かって、社会のよりよい機能、つまりは社会主義に向かう強い力がもたらされました。個人行動の組織化と統制は、社会理論はどうあれ機械的に不可欠なものとなっています。もし銀行の国家統制から始め、続いて輸送の統制、重工業の統制、産業一般の統制、商業の統制等々を行えば、そうしたすべてを包括する統制は、国の経済のあらゆる部門を国有化するのと同じ事になります。これが社会主義化のプロセスとなります。社会主義と個人主義は、白と黒のように相反するものではないのです。両者の間には多くの中間的な段階があるのです。

山賊行為寸前の個人主義もあるし、社会主義と等価な規律や組織化もあります。計画経済の導入は相当部分まで、経済をまとめる人々、技能ある専門インテリゲン

ツィアによります。その人々は一步ずつ、社会主義的な組織化原理へと転向させられるのです。そしてこれこそ最も重要な点です。組織化は社会主義に先立つものです。これがもっと重要な事実です。組織化なくして、社会主義思想は単なる思想でしかありません。

スターリン： 個人と集合体との間には、埋められない対立などありませんし、またあるべきでもありません。個人の利益と集合体の利益との間も同じです。そうした対立があってはならないのは、集産主義、社会主義は個人の利益を否定するのではなく、個人の利益を組み合わせることで集合体の利益にするからです。社会主義は、個人の利益から己を捨象することはできません。社会主義社会だけが、そうした個人的利益を最も十全に満たせるのです。さらに社会主義社会だけが、個人の利益をしっかり保護できるのです。この意味で、「個人主義」と社会主義との間に埋められない対立などありません。しかし階級間の対立、財産を持つ階級、資本家階級と、苦闘する階級、プロレタリア階級との間の対立を否定できますか？

一方では、財産を持つ階級が銀行、工場、鉱山、運輸、植民地のプランテーションを所有しています。こうした人々は自分の利益しか目に入らず、利潤ばかり必死で追いかけます。

彼らは集合体の意思に屈しません。あらゆる集合体を自分の意志に従属させようと苦闘します。一方では、貧困者の階級、収奪された階級があり、工場も仕事も銀行も所有しておらず、自分の労働力を資本家に売って暮らすしかなく、自分の最も基本的な要件すら満足させる機会を欠いております。こうした正反対の利益と苦闘で、折り合いをつけられるはずがあるのでしょうか？ 私の知る限り、ルーズベルトはこうした利害の間で折り合いをつける道の発見に成功しておりません。そして、経験が示すようにそれは不可能です。

ちなみに、あなたはアメリカの状況を私よりよくご存じですな。私は彼の地に行ったことがないし、アメリカの状況については文献で主に見ているもので。しかし私は社会主義のために戦う体験を多少は持っており、この体験の語るところでは、ルーズベルトが資本家階級を犠牲にしてプロレタリア階級の利益を満たそうという本当の試みを行えば、資本家階級は大統領の首をすげ替えるはずです。資本家たちはこう言うでしょう。大統領はいくらでも変わるが、我々は永遠に続くのだ。もしあの大統領やこの大統領が我々の利益を守らないなら、別の大統領を探すまでだ、とね。大統領は資本家階級の意思に逆らうことなど、何ができるというのですか？

ウェルズ： 私は、人類を貧乏人と金持ちに分けるというその単純化した分類には反対です。もちろん利潤だけのために活動する人々の区分もあります。しかし、そうした人々はここでと同じくらい、西側でも迷惑な存在と見なされているのではありませんか？ 西側にだって、利潤が目的ではなく、ある程度の富を所有し、投資をしてその投資から利潤を得たいとは思っていても、それを主要な目的と考えない人だってたくさんいるのではありませんか？ 彼らは投資を、不都合な必要物と見なしています。利潤以外のものに行動を刺激されている、有能で献身的なエンジニア、経済の組織家たちはたくさんいるのではありませんか？

私見では、現在の仕組みが不満足なものだと認め、未来の社会主義社会で大いなる役割を果たすよう運命づけられた有能な人々の無数の階級があるのです。過去数年にわたり、私はエンジニアや航空士、軍の技術関係者などの広範な集団の間に、社会主義とコスモポリタン主義を支持するプロパガンダを行う必要性に、大きく関わりその必要性を考えてきました。こうした人々に、二分された階級闘争プロパガンダを持って近づいても無駄です。こうした人々は世界の条件を理解している。それがろくでもない混乱状態だとは理解していても、あなたの単純な階級戦争対立はナンセンスだと考えるでしょう。

階級闘争

スターリン： 人類を金持ちと貧乏人にわけける単純化した分類に反対なさる。もちろん中間はありますよ、あなたのおっしゃった専門インテリゲンツィアで、中にはとても善良でとても正直な人々もおります。中にはまた、不正直で邪悪な人々もあり、いろいろな連中がおります。だがまず人類は金持ちと貧乏人に、財産保有者と収奪されている者に分けられます。そしてこの根本的な分割から自分を捨象し、貧乏人と金持ちの対立から己を捨象するのは、根本的な事実から己を捨象するということです。中間的な中間層の存在は否定しませんし、それはこの対立する階級のどちらかの立場を取れるか、あるいはこの闘争において中立的または準中立的な立場も採れます。しかし繰り返しますが、この根本的な社会の分割と、この二つの主要階級間の根本的な闘争から己を捨象するのは、事実を無視するということです。この闘争は現在もこれからも続きます。結果はプロレタリア階級、労働者階級により決まるのです。

ウェルズ： しかし貧乏ではないが、働くし生産的に働く人々はたくさんいますよ？

スターリン： もちろん、小地主、工芸家、小規模商人はおりますが、国の運命を決するのはそうした人々ではなく、辛苦する大衆であり、社会が必要とするあらゆるものを生産する人々なのです。

ウェルズ： しかし、まったくちがった種類の資本主義がいろいろあります。利潤のことしか考えず、金持ちになることしか考えない資本家もおります。しかし、犠牲を払おうとする者もおります。老モルガンを例にとりましょう。あの御仁は利潤のことしか考えませんでした。社会の寄生虫で、単純に富を蓄積しただけです。しかしロックフェラーはどうでしょう。見事な組織家です。石油の配送をどう組織すべきかについてのお手本を構築し、それは真似る価値があるものです。あるいはフォードはどうでしょう。もちろんフォードは利己的です。しかし彼は、あなたもお手本にしている合理化された生産の見事な組織家ではありませんか？

最近になって、英語圏ではソ連に対する見解に重要な変化が見られたことを強調しておきたい。まずその理由は、日本の立場とドイツでの出来事です。しかし、国際政治から生じるもの以外にも理由はあります。もっと深遠な理由があるのです。

具体的には、多くの人々が私利私欲に基づく仕組みが崩壊しつつあるという事実を認識するようになったということです。こうした状況では、両世界の対立を前面に押し出してはならず、あらゆる建設的な運動、建設的な力をすべて組み合わせ、一つの線上にできるだけ載せるよう頑張るべきだと思います。どうも私のほうがあなたよりも左派にいるように思えるのですよ、スターリンさん。私はあなたよりも、旧体制が終わりに近いと思っているのです。

技術者階級

スターリン：利潤だけを追求し、ひたすら金持ちになろうとする資本家の話をするときには、別に彼らが他に何もできない、無価値きわまる連中だなどと言うつもりはありません。その多くの人々は偉大な組織化の才能を持っており、それを否定しようとは夢にも思いません。我々ソヴィエトの人々も、資本家たちからは大いに学びます。そしてあなたがずいぶん否定的に述べたモルガンは、まちがいなく優れた有能な組織家でした。しかし世界を再建する覚悟のある人々の話をしているなら、利潤という大義に忠実に奉仕する人々の中からそうした人々を見つけるのは無理です。我々と連中は対極を成しています。フォードとおっしゃいましたね。もちろん、彼は有能な生産の組織家です。しかし彼が労働者階級に対してどんな態度かご存じないのですか？ 彼がどれほどの労働者を道端に放り出したかご存じないのですか？

資本家は利潤に釘付けとなっております。そして地上のどんな力であっても、資本家を利潤からは切り離せません。資本主義を廃止するのは、生産の「組織者」ではなく、専門インテリゲンツィアでもなく、労働者階級です。なぜならさきほど述べた階層は独立の役割を果たさないからなのです。エンジニア、生産の組織者は自分の好きなように働くのではなく、命じられた通りに働き、雇用者の利益に奉仕する形で動くのです。もちろん例外はあります。この階層でも資本主義の中毒から覚醒した人はいます。専門インテリゲンツィアたちは、ある条件の下では奇跡を起こし、人類に大きく貢献できます。しかし大きな被害も引き起こせます。我々ソヴィエトの人民も、専門インテリゲンツィアについては少なからぬ経験を持っています。

十月革命以後、専門インテリゲンツィアの一部は新社会建設の仕事への参加を拒みました。この建設作業に反対して妨害したのです。

専門インテリゲンツィアをこの建設作業に引き出そうと、我々は本当に手を尽くしました。あれもやり、これも試しましたよ。我々の専門インテリゲンツィアたちが、活発に新体制を支援すると合意するまでには、少なからぬ時間がかかりました。今日では、この専門インテリゲンツィアの裁量の部分は、社会主義社会構築の最前線の一部です。この経験があるので、我々は専門インテリゲンツィアのよい面も悪い面も、見くびるにはほど遠いところにおり、一方で彼らが被害を起こせることも、そして一方では「奇跡」を起こせるのも知っております。もちろん、何か一撃で専門インテリゲンツィアたちを資本家の世界から精神的に引き離せたら事態は変わってくるでしょう。が、それはユートピアです。

ブルジョワ世界と敢えて決別して、社会再構築に取り組もうとする専門インテリ

ゲンツィアがどれほどおりますかな？ たとえばイギリスやフランスで、そうした人々がそんなにたくさんいるとお考えですか？ いいえ、自分の雇い主と決別して世界の再建に取りかかる人など、いないも同然です。

それに、世界を作り替えるためには、政治権力が必要だという点を見捨てるでしょうか？ ウェルズさん、私の見たところ、あなたは政治権力の問題を見くびりすぎているので、それがすっぽり頭から抜け落ちているのです。

そうした人々は、この世で最高の善意を持っていたとしても、権力奪取の問題を提起できないなら、そして実際に権力を持っていないなら、何ができるというのですか？ せいぜいが、権力を握った階級を助けるくらいですが、世界そのものを変えることはできません。それは資本家階級に取って代わり、以前の資本家のように主権支配者となるはずの、偉大な階級のみがなし得ることです。その階級とは労働者階級です。もちろん専門インテリゲンツィアの支援は受け入れねばなりません。そして専門インテリゲンツィアのそのお返しに支援はされます。しかし専門インテリゲンツィアが独立の歴史的役割を果たせるなどとは思いません。世界の改変は壮大で複雑で痛々しいプロセスなのです。その任のためには偉大な階級が必要です。大型船が長い航海に出るのです。

ウェルズ： しかしながら、長い航海には船長と航海士が必要です。

スターリン： それはその通り。しかし長い航海でまず必要なのは大きな船です。船なしの航海士など何の意味がありますか？ 無為の人にしかありません。

ウェルズ： その大きな船は人類であって、ある階級ではありません。

スターリン： ウェルズさん、あなたはですな、明らかにあらゆる人間は善良だという前提から出発されていますな。しかし私は、邪悪な人間も多いことを忘れはしません。私はブルジョワジーの善良さを信じない。

ウェルズ： 専門インテリゲンツィアたちについて数十年前の状況が思い出されます。当時専門インテリゲンツィアたちは明らかに賢かったのですが、やるが多すぎたし、あらゆるエンジニア、技師、知識人は自分の機会を見つけました。だからこそ専門インテリゲンツィアたちは、最も革命的でない階級だったのです。しかし現在では、専門知識人はあふれるほどおり、その意識は激変しました。かつては革命の話などに耳を貸さなかった技能者は、いまや大いに興味を示しています。最近私は、我が偉大なイギリスの科学協会、王立科学協会と夕食をとっておりました。会長の演説は、社会計画と科学的統制についてのものでしたよ。30年前なら、私がいま彼らに語るような話には耳を貸さなかったでしょう。今日では、王立科学協会の長が革命的な見方をしており、人間社会の科学的再編に固執しています。考え方は変わるのです。あなたの階級闘争プロパガンダは、こうした事実の後れを取っています。

スターリン： はい、それは知っています。そしてそれは、資本主義社会がいまや袋小路

に入っているという事実で説明がつきます。資本家たちはこの袋小路からの脱出方法の中でこの階級の尊厳や、この階級の利益に相反しないものを探しておるのですが、それが見つからないのです。ある程度は、この危機から四つん這いになって這いだしてくることはできるでしょう。しかし頭を高く掲げて歩み出てくる出口は見つけられず、資本主義の利益を根本的に乱さないような出口が見つからない。これはもちろん、専門インテリゲンツィアたちの実に広い範囲に認識されておりますよ。その相当部分は、自分の利益の集まりを、この袋小路からの出口を示せる階級の利益と一致させようとしております。

ウェルズ： 他ならぬあなたこそ、実務面から見た革命についていろいろご存じでしょう、スターリンさん。大衆が蜂起したりすることはあるのでしょうか？ すべての革命は少数派が行うのだというのは、確立された真実ではありませんか？

スターリン： 革命をもたらすには、主導的な革命的少数派が必要です。しかし最も才能あり、献身的でエネルギー豊富な少数派であっても、何百万人もの少なくとも受動的な支援をあてにしないと、身動きが取れません。

ウェルズ： 少なくとも受動的、ですか？ あるいは無意識的な？

スターリン： 部分的には半ば直感低位で半ば無意識なものもありますが、何百万人もの支援なくしては、最高の少数派も無力です。

暴力の位置づけ

ウェルズ： 西側での共産主義プロパガンダを見ておりますと、現代の条件下でそうしたプロパガンダはえらく古くさく聞こえます。というのもそれは蜂起をうながすプロパガンダだからです。社会の仕組みの暴力的な転覆を支持するプロパガンダは、圧政に対して向けられているときには結構なものです。しかし現代の条件下では、どのみち仕組みが崩壊しつつあるので、力点は効率性、能力、生産性に置かれるべきで、蜂起に置くべきではありません。蜂起的な物言いは陳腐です。西側での共産主義プロパガンダは、建設的な心を持つ人々にとってうっとうしいだけです。

スターリン： もちろん旧体制は崩壊しつつあり、衰退しています。それは事実です。しかしこの死にゆく仕組みを保護し、救うために他の手段による新しい試みが行われているのも事実です。

あなたは正しい前提からまちがった結論を引き出している。旧世界が崩壊しつつあるとおっしゃったのは正しい。しかし、それが自主的に崩壊していると考えるのはまちがっている。いいや、ある社会の仕組みが別のものになるのは、複雑で長い革命的なプロセスなのです。単純な自発的プロセスではなく、闘争です。階級の衝突とつながるプロセスなのです。資本主義は衰退していますが、勝手に倒れるしかないほど腐敗した木と単純に比べてはいけません。いいえ、革命、つまりある社

会の仕組みが別物と置き換わるのは、常に闘争であり、痛々しく残酷な闘争で、生死をかけた闘争なのです。そして新世界の人々が権力を握る度に、彼らは旧世界が旧権力を武力で再興させようとする試みに対して自衛しなければなりません。新しい世界の人々は常に警戒を緩めず、常に新たな仕組みに対する旧世界の攻撃を追い払う準備をしておかねばならないのです。

ですから、古い社会の仕組みが崩壊しつつあるとおっしゃったのは正しい。しかしひとりでに崩壊しているわけではありません。たとえばファシズムを考えましょう。

ファシズムは、旧体制を暴力で温存しようとしている反動勢力です。ファシストをどうするつもりです？ 連中と議論してみますか？ 説得してみますか？ でもそんなのは何の効果もありません。共産主義者は暴力の手法をこれっぽっちも理想化するつもりはありません。しかし彼ら、共産主義者たちは不意をつかれたくはない。旧世界が自発的に舞台から退くのをあてにはできない。彼らは旧体制が暴力的に自衛しているのを見て、だからこそ共産主義者たちは労働者階級に対し、暴力には暴力で答えよ、古い死にゆく秩序に押し潰されないよう手を尽くせ、そいつらが君たちに手錠をかけるのを許すな、旧体制の転覆に使う手を縛らせるな、と告げるのです。ご覧のとおり、共産主義者たちはある社会体制を別のもので置きかえるのを、単に自発的で平和的なプロセスとしては見て折らず、複雑で長く暴力的なプロセスとみております。共産主義者たちは、事実を無視はできないのです。

ウェルズ：しかし現在の資本主義社会で起きていることをご覧なさい。崩壊は単純なものではありません。暴漢主義へと対抗しているのは反動的暴力の勃発です。そして反動的で知的でない暴力との紛争となると、社会主義は法に訴え、警察を敵と見なすよりも、反動主義者に対する戦いの中で警察を支援すべきです。古い蜂起型社会主義の手法で動くのは無益だと思いますね。

歴史の教訓

スターリン：共産主義者は、旧弊な階級が自発的に歴史の舞台を放棄したりはしないと教える豊かな歴史的経験を基盤としています。

17世紀イギリスの歴史を思い出しましょう。多くの人が、古い社会の仕組みが衰退したと言っていたのではありませんか？ しかしそれでも、それを潰すにはクロムウェルが武力を使うしかなかったのでは？

ウェルズ：クロムウェルは憲法に基づいて行動し、憲法秩序の名において行動したのです。

スターリン：憲法の名において彼は暴力に頼り、王の首をはね、議会を解散させ、一部を逮捕しまた一部の首をはねたではありませんか！！

あるいは我が国の歴史の例を見ましょう。長きにわたり、ロシア帝政が衰退し、崩壊しつつあったのは明らかだったではありませんか？ でもそれを打倒するためにはどれほどの血が流されねばならなかったのでしょうか？

そして十月革命はどうでしょう？ 我々だけが、ボリシェヴィキだけが唯一の正しい道を示していると知っていた人はたくさんいたのではなかったですか？

ロシア資本主義が衰退したのは明らかではありませんでしたかな？ しかし抵抗がいかに強かったかはご存じでしょう。十月革命を、内外問わずあらゆる敵から守るためにどれほどの血が流されねばならなかったかもご存じでしょう。

あるいは18世紀末のフランスをご覧ください。1789年のはるか以前から、多くの人々は王権と封建主義体制がいかに腐っているかをはっきり知っておりました。しかし民衆蜂起、階級の衝突は避けられませんでした。なぜか？ 歴史の舞台を明け渡さねばならない階級は、自分たちの役割が終わったことを最後まで納得しないからです。彼らにそれを納得させるのは不可能です。旧秩序の衰退する表面に現れた亀裂は、修理して救えると考ええるのです。だからこそ、死にゆく階級は武器を取り、支配階級としての自分の存在を守るために手を尽くすのです。

ウェルズ：しかしフランス大革命の指導者たちの中には、弁護士が少なからずおりました。

スターリン：革命運動におけるインテリゲンツィアの役割を否定なさるのですか？ フランス大革命は、弁護士の革命でしたかな？ むしろ人民の革命であり、大量の人々を封建主義に反対させ、平民の利益を掲げることで蜂起させ、勝利をおさめたものではなかったでしょうか？ そしてフランス大革命の指導者に名を連ねていた弁護士たちは、旧秩序の法に基づいて行動したのですか？ 新しいブルジョワ革命法を導入したのではありませんでしたか？

歴史の豊かな体験によれば、いままで別の階級のために道を譲った階級など一つたりともないことがわかります。世界史上、そんな先例はないのです。共産主義者たちは歴史のこの教訓を学んでいます。共産主義者たちは、ブルジョワジーが自発的に退いてくれれば大歓迎です。しかしそんな事態の展開はありそうにないのです。それが経験の教えるところです。だからこそ共産主義者たちは、最悪の事態に備えて、労働者階級に警戒を怠らず、戦いの用意を調べておくよう求めるのです。自軍の戦いぶりを抑えようとする指揮官などだれが求めましようか。敵が降伏しないのをわかっておらず、叩き潰すしかないことがわからない指揮官など役立たずです。そうした指揮官になるのは、労働者階級をだまし、裏切ることになります。だからこそ、あなたにとっては古くさく思えるものが、実は労働者にとっては革命的な必要性の手段なのだと私は考えるわけです。

革命の起こし方

ウェルズ：武力を使わざるを得ないのは否定しませんが、闘争の形態は、既存の法律が提示する機会にできる限りうまくあてはまるものになるべきだと考えます。これは反動的な攻撃から防御されねばなりません。旧体制を解体する必要はありません。というのもそれは、現状でも自分で十分に崩壊しつつあるからです。だからこそ、旧体制に対する違法な蜂起は、私には古くさく、旧弊に思えます。ちなみに、私は真

実をもっとはっきり述べるために意図的に誇張しています。自分の視点は以下のようによにまとめられます：

まず、私は秩序を支持する。次に、私は現在の仕組みを、秩序を確保できない限りにおいて攻撃する。第三に、階級闘争プロパガンダはまさに社会主義が必要としている、教育を受けた人々を社会主義から遠ざけかねないと思う。

スターリン： 大きな狙い、重要な社会目標を達成するには主力、橋頭堡、革命階級が必要です。次にこの主力のための補助的な軍の支援を組織する必要があります。この場合、この補助的な力は党であり、インテリゲンツィアの最善の勢力がここに所属します。たったいま、「教育を受けた人々」の話をされましたな。が、お考えになっていたのは、どんな教育を受けた人々でしょうか？ 17世紀のイギリスでも、18世紀末のフランスでも十月革命前夜のロシアでも、旧体制側に教育を受けた人々はたくさんいませんでしたかな？ 旧体制には、多くの高等教育を受けた人々が仕えていて、彼らは旧秩序を擁護し、新秩序に反対しました。教育は武器ですが、その効果はそれを使う人々の手で決まり、だれが打倒されることになるかで決まるのです。

もちろんプロレタリア、社会主義は、高等教育を受けた人々を必要とします。明らかに、バカ者はプロレタリアが社会主義のために戦い、新社会を作るのに役立ちません。私はインテリゲンツィアの役割を過小評価はしていない。それどころか、その役割を強調します。しかし問題は、ここで話しているのはどのインテリゲンツィアなののでしょうか？ というのも、インテリゲンツィアにもいろいろあるからです。

ウェルズ： 教育システムに激変がなければ革命はあり得ません。二つの例を挙げれば十分でしょう。古い教育システムに手をつけず、したがって決して共和国になれなかったドイツ共和国の例と、教育システムの過激な改変にこだわるだけの決意を欠いているイギリス労働党の例です。

スターリン： その指摘は正しいものです。あなたの三つの点について回答するのをお許しください。

まず、革命にとって重要なものは社会的な橋頭堡の存在です。この革命の橋頭堡は労働者階級です。

次に、補助的な力が必要です。共産主義者が党と呼ぶものです。知的労働者や、労働者階級と密接に繋がった専門インテリゲンツィアの要素は党に所属します。インテリゲンツィアが強力になれるのは、労働者階級と組み合わせたときだけです。労働者階級に反対するようならそれは役立たずとなります。

第三に、変化のテコとして政治権力が必要です。新しい政治権力は新しい法律、新しい秩序、つまり革命的秩序を作り出します。

私はどんな秩序も支持しているわけではない。労働者階級の利益にかなう秩序を支持している。しかし旧秩序の法律のどれかが、新秩序のための闘争に有益な形で利用できるなら、その旧法は利用されるべきです。現在の仕組みは、人民にとって必要な秩序を確保できない限りにおいてのみ攻撃されるべきだというあなたの主張には、反対しようがありませんな。

そして最後に、共産党が暴力まみれだとお考えなら、それはまちがっている。支配階級が労働者階級に道を譲ることに同意するなら、みんな暴力的な手段を喜んで放棄するでしょう。しかし歴史の経験はそんな想定を否定するものとなっています。

ウェルズ：しかしイギリスの歴史には、ある階級が自発的に権力を別の階級に渡した例があります。1830年から1870年にかけて、18世紀末にはまだかなりの影響力を持っていた貴族が、激しい闘争なしに、権力をブルジョワジーに譲り渡して、それが王室の感情的な支持につながりました。結果的に、この権力移譲は金融寡頭支配の確立をもたらしたのです。

スターリン：しかしあなたはこっそりと、革命の問題から改革の問題に話をすりかえている。これは同じことではない。チャーティスト運動が、19世紀イギリスの改革において大きな役割を果たしたとは考えないのですか？

ウェルズ：チャーティストたちは大したことをせず、何の痕跡も残さずに消え去りました。

イギリスのブルジョワ

スターリン：同意できません。チャーティストたちと、かれらが組織したストライキ運動は大きな役割を果たしました。選挙権拡大に対する多くの譲歩や、通称「腐敗選挙区」の廃止や、「チャーター（憲章）」の一部の要求について、支配階級を説得したのです。

チャーティスト運動が果たした歴史的な役割は決してつまらないものではないし、支配階級の一部に大きなショックを避けるため、ある種の譲歩、改革を行うよう強制したのです。一般的に言って、あらゆる支配階級のうち、イングランドの支配階級は、貴族もブルジョワジーも、彼らの階級的利益の観点から、彼らの権力を維持するという観点から、最も賢明で最も柔軟でした。たとえば現代史で言えば、1926年のイギリスゼネストを例にとりましょう。他のブルジョワジーなら、あんな事態が起きたときに、つまり労働組合一般評議会がストライキを呼びかけたときに、まっ先にやるのは労働組合指導者を逮捕することだったでしょう。イギリスのブルジョワジーはそれをやらなかった。つまり自分の利益の観点から賢明に行動したわけです。

あんな柔軟な戦略を、アメリカやドイツ、フランスのブルジョワジーが採用するとはとても思えません。自分たちの支配を維持するため、イギリスの支配階級は小さい譲歩や改革をためらったりはしませんでした。しかしそうした改革が革命的なものだと思うのはまちがいです。

ウェルズ：あなたは我が国の支配階級について、私よりも高い評価を下しておられる。しかし小さな革命と大きな改革とは大差ないではありませんか？ 改革は小さな革

命ではないでしょうか？

スターリン： 下からの圧力、つまり大衆からの圧力により、ブルジョワジーはときに、既存の社会経済体制の基盤を維持しつつ、ある種の部分的な改革を譲歩することもあります。

こうした行動により、ブルジョワジーは自分の階級支配を温存するためにこうした譲歩が必要だと計算しているのです。これが改革の本質です。しかし革命というのは、ある階級から別の階級への権力移譲です。だからこそ、どんな改革も革命とは呼べないのです。だからこそ、改革という手段を通じ、支配階級が譲歩を行うことによって、知らぬ間にあるシステムから別のものへと移行するような社会システム変化はあてにできないのです。

ロシアのやっていること

ウェルズ： この対談については大いに感謝しております。私にとって大きな意味合いを持つものでした。いろいろ私に説明する中で、おそらく革命以前の非合法サークルで社会主義の基本を説明しなければならなかったときのことを思い出されたことでしょう。現在では、何百万人もがその意見、一言一句に耳をかたむけている人物は二人しかおりません。あなたとルーズベルトです。他の連中は好きなだけ説教しても、その発言は印刷もされず聞かれもしません。

私は未だに、貴方の国で何が実践されたか十分に理解できておりません。昨日到着したばかりなので。しかし、すでに健康な男女の幸せな顔は見ており、何かきわめて重要なことがここで行われているのはわかります。1920年との対照ぶりは驚くべきものです。

スターリン： 我々ボリシェヴィキがもっと賢ければ、もっとずっと多くのことができたのですが。

ウェルズ： いや、人間がもっと賢ければ、です。人間の脳を再構築する五カ年計画を考案するとよいでしょう。脳は明らかに、完璧な社会秩序に必要な多くのものを欠いておりますから。(笑)

スターリン： ソヴィエト作家連合会議まで滞在するおつもりではないのですか？

ウェルズ： 残念ながら、他にいろいろ約束がありまして、ソ連には一週間しか滞在できないのです。

あなたに会いに来て、この話し合いにととても満足しております。しかしできる限りのソヴィエト作家と会って、PENクラブへの参加の可能性について議論するつもりです。これはギャルズワージーが創立した国際作家組織です。彼の死後、私が会長となりました。この組織はまだ弱々しいものですが、多くの国に支部を持ち、

もっと重要な点として、会員たちの演説はマスコミで広く報道されます。このクラブは意見の自由な表現を重視します――反対意見ですらね。

この点をゴーリキーと議論したいと思っております。あなたたちがこの国で、それほどの自由の準備ができていないかはわかりませんが……

スターリン：我々ボリシェヴィキはそれを「自己批判」と呼びます。ソ連では広く使われておりますよ……



H・G・ウェルズ by デヴィッド・ロウ

第 3 章

ロシアにおける自由について

H・G・ウェルズ

以下のメモは、いまの会話に追加すべきものとしてとても興味深い。これは、8 月に開催されたソヴィエト作家会議へのメッセージとして用意されたものだ。このコピーがマクシム・ゴーキーと会議の組織議長に託され、ウェルズ氏はこのロンドン PEN クラブからの招待が、若いロシア作家たちにとって、自由と自主性についての真摯な議論の基盤となることを願った。だが、この慎重に言葉を選んだメッセージが彼らの元に届いたという証拠はまったくない。公式、非公式を問わずどんな返事も、ロンドン PEN クラブやウェルズ氏の元に届いてはいない。ソヴィエトロシアの当局は、イギリスの保守的な老女たちと同じくらい、転覆的なメッセージについては臆病に思える。ロシアはいまだに正統教義の要塞なのだ。その正統教義の主義者こそ代替わりしたとはいえ。

ソヴィエト作家会議へのメッセージ

1934 年 7 月

H・G・ウェルズ氏は、重要な先約があるためにソヴィエト作家会議に出席できないことをきわめて遺憾に思うものであります。いずれにしても、それはきわめて興味深く喜ばしい経験になったでしょうが、日程の衝突のためにモスクワに留まって個人的に彼がきわめて内心で重視している問題を議論できなかったことは、なおさら残念に思えます。それはソヴィエト作家連合と、国際 PEN クラブとして知られる組織の提携の確立です。H・G・ウェルズ氏は、ジョン・ギャルスワージー氏の後任として、このクラブの会長なのです。PEN システムは、二つの大きな目的のために存在しています――さまざまな国の作家や文芸労働者たちの、快い個人的、社会的関係の維持で、それを晩餐会、訪問、視察、見学、年次会議などにより維持すること、そしてそれ以上にずっと重要なのが、世界中あらゆるところでの表現の自由と好評の自の権利を、あらゆる手を尽くして現実的に確保することです。これはまた、翻訳における能力の基準をまとめて確立する付随的な活動と、作家たちの商業的利益保護のために存在する各国の様々な団体、たとえばイギリス作家協会などを集め、自分たち自身やお互いにもっと密接な関係となるようにする活動もあります。この会員たちは長いこと、ロシアの文芸活動と接触するのが望ましいと感じておりました。みんなロシア PEN クラブの設立を待望しています。

しかしながら、世界中のPENクラブの一般憲章では、あらゆるPENがどんな政治的、社会的見解を持っていようと有能な作家すべてに自由に開かれ、政府や公的支配からは完全に自由な自治組織になることが必須だと指摘しなければなりません。この条項があるため、PEN国際委員会は、非常に遺憾ながらベルリンPENを排除しなければなりません。ベルリンPENは、ユダヤ人や共産主義的、平和主義的だからという理由で各種の作家を除名したからです。そして現在ではローマPENとも協議中です。彼らもファシスト政権と政治的に反対している作家たちを禁止しているようだからで、これまた決裂に終わるかもしれません。したがって、ロシアPENクラブの設立を提案する中で、私たちは当初から、このクラブが政治支配からは自由であり、その会合や会員における、あらゆる種類の意見について、根本的な寛容の原則を遵守する必要があると規定しておくべきです。

この寛容性を維持するという問題は、決して簡単なものではないことを私たちは認識しています。現在ではナチ党による迫害で、認知されたドイツPENクラブはドイツ土壌には存在できず、ドイツ国民大衆とは分断されてしまっています。これはとても不満な状態であり、一時的な状態でしかあり得ないと私たちは感じています。私たちは、その社会の主要な大衆と切り離されている「亡命」クラブはあり得ないと考えます。その一方で、ありとあらゆるドイツの思想や芸術表現とは接触を保ちたいと考えています。そして私たちは、ロシア作家の組織がどこまで私たちの寛大さの原理を受け容れる用意があるのか、はつきりわかりません。この問題についてのあなたたちの見方を、仲間として伝えていただければ幸いです。ウェルズ氏の私見ですが、完全なPENクラブがその本来の土壌に設立されるのが、何らかの理由で不可能であるような一部の場合には、存在できるようなもっと制限された組織とも、連携関係とでも呼ぶものを確立する必要があるのではと思いかけております。これはイタリアの場合には必要かもしれませんし、この可能性についてあなたたちの反応を是非とも聞かせていただきました。しかしながら、私たちとしては、私たちが代表しようとしている、思想と文芸の世界共和国に、あなたたちが制約なしに参加する用意があると報されるほうがずっと嬉しいのですが。

第 4 章

議論

4.1 バーナード・ショー氏のコメント

この傑出した人物二人の会話、というより衝突は、それぞれの見方について、目新しいことは何も教えてくれない。だが一種のコメディとしておもしろいものだ。そしてスターリンもその点に気づいていたのではと私はにらんでいる。というのも彼は、鋭いコメディのセンスを持ち、きわめて即座に愛想良く笑う人物だからだ。以下に、注目して楽しむべき点を挙げよう。

スターリンはウェルズにきちんと真面目に耳を傾け、その主張を正確に理解して、回答では常に正確にポイントを突いてくる。ウェルズはスターリンの話を聞いていない。彼はじりじりと辛抱して、スターリンが話し終えたらまた自分が話そうと待っているだけだ。彼は、スターリンの知っているすべてのことについて、自分のほうがスターリンよりよく知っているつもりでいる。スターリンに教わるためではなく、自分がスターリンに教えるつもりでやってきたのだ。彼はクリソルド主義で世界を救うつもりだ。彼はクリソルドが、コントの道徳化された資本家でしかないのをわかっていない。彼は階級闘争の困難にマシな解決策がないので、コントの焼き直ししかできないのだ。クリソルドを組織化するために創設されたロータリークラブは、ほぼ即座に、コントもクリソルドも H・G・ウェルズすら聞いたことがない連中のお食事クラブと化した。だが H・G は、スターリンと同じくロータリークラブにも関心を払わず、ファビアン主義者たちとはちがってまだ存在していたコント主義者たちと論争する必要もなかったのだ。クリソルド主義こそが最新のネタだと信じていて、スターリンに対して気配りもなしに、階級闘争などナンセンスだと保証してみせるのだ。

(訳注：クリソルドとはウェルズの 1926 年の長編『ウィリアム・クリソルドの世界』の主人公/語り手。ビジネスマンの小せがれとして育ったブルジョワ階級の主人公が、60 歳を前にして己の人生観を語り、社会、経済、お金についての見方、愛、そして世界統一政府を作り出そうとする金持ちや権力者たちの「陰謀」について述べるというもの。だから本書での「クリソルド」は、プチブルと読み替えてかまわない。)

スターリンは経験からクリソルドどもがどの程度の価値をもつものか知っているのだ。それが話題にのぼると、礼儀正しく H・G の発想をマルクス主義的な秩序と規模感におさめてあげようとする。だが H・G は、スターリンが階級闘争のバカげた定式化にこだわっていると思い込んでいるので、彼の説明を無関係で退屈な妨害として扱い、それを親切ぶって「いまおっしゃったことにほぼ同意します」と応えてから、またもやクリソルドの重要性に関する詳述に映る。

スターリンは、鉄壁の忍耐を持って、再びウェルズにポストマルクス主義政治科学の明解な入門講義を与える。だがそれがウェルズに与える影響は、アヒルの背中にかかった水のごとし。自分自身の意見の流れを追求する前に、彼はこんな優しい警告で、ウェルズの考える形での分をわきまえるようにスターリンに告げる。「おそらく私は、あなたよりは政治の経済的解釈をもっと強く信じているのでしょうね」。そして「こうした人々[クリソルドたち]に、二分された階級闘争プロパガンダを持って近づいても無駄です」とスターリンを叱責するが、スターリンがそうした連中に、片手には仕事、片手には銃を持つ二分された形でアプローチする必要があったのだということは忘れてしまう。彼はクリソルドの名前がポンデレヴォ（訳注：ウェルズ『トーノ・バンゲイ』の主人公。エンジニアだが営利主義に操られてインチキ菓の製造や破壊兵器製造などに走る）だった日々のことを忘れてこう宣言する。「こうした人々は世界の条件を理解している。それがろくでもない混乱状態だとは理解していても、あなたの単純な階級戦争対立はナンセンスだと考えるでしょう」。

スターリンは実質的に、それがまさにその連中のダメなところなのだと応え、それをH・Gのためにきれいに整理してあげる。だが、スターリンが外国人だし、セントジェームズ広場の国際問題研究所会合に出席したこともないし、『ラウンドテーブル』も読んでいないから、クリソルド主義の可能性についてまるで理解できていないに決まっているし、マルクスという悪意に満ちた変質者に頭を破壊されているはずだというイギリス人的な確信を、ウェルズから振り払えるものは何もない。これを印象づけるべく、彼はポンデレヴォの生まれかわりたるクリソルドを、モルガン＝ロックフェラー＝フォードとして会話に飛び込ませる。こうした連中は人を組織化できる。だったら、そういう連中を呼んできてスターリンに協力させれば？ その示唆にさらにとどめを刺すのが「どうも私のほうがあなたよりも左派にいるように思えるのですよ、スターリンさん」なる一節だ。

スターリンは雄々しく、こうしたクリソルドたちが組織化できるのは認めるが、問題はその連中を組織化するのはどうすればいいのかという問題だ、と付け加える。そしてこれぞまさにソヴィエトが見事に解決した問題なのだ。ただしそれは、私有財産に基づく解決ではなかったし、ときにはクリソルドの後頭部に、優しいながらも一貫した銃口を押しつけることがなかったわけではない。

そんな具合に話は続く。文字通りに言えば、このインタビューには親愛なるH・Gが耳が聞こえるという証拠がまったく含まれていないというのは本当ではない。だが私としては敢えて、ロバート・オウエンの有名な戦術「議論するな、自分の主張を繰り返せ」を、ここでのウェルズほど徹底して適用した例はないとすら言いたい。私がそれをなおさら楽しめるのは、この私がスターリンに会ったときに真っ先に気がついたのが、彼が一級の聞き手だということだからだ。これほど見事に話せるのに、自分がしゃべろうと焦ったりしない人間はスターリンが初めてだった。ウェルズはとても話がうまい。だが聞き手としては世界最悪だ。これは幸運なことだ。彼のビジョンはあまりに広く確信に満ちているので、ちょっとでも反論されると、偏見に満ちて雄弁なまでに毒舌まみれの苛立ちの怒りで目がくらんでしまうからだ。そしてそうになったらスターリンは、H・Gの故国でのもっと親密な友人たちほどの寛容さは示してくれないかもしれない。

スターリンは、ウェルズに一度、糸口を投げている。こう言ったのだ。

そうした人々は、この世で最高の善意を持っていたとしても、権力奪取の問題を提起できないなら、そして実際に権力を持てないなら、何ができるというのです

か？ せいぜいが、権力を握った階級を助けるくらいですが、世界そのものを変えることはできません。それは資本家階級に取って代わり、以前の資本家のように主権支配者となるはずの、偉大な階級のみがなし得ることです。その階級とは労働者階級です。もちろん専門インテリゲンツィアの支援は受け入れねばなりません。そして専門インテリゲンツィアのそのお返しに支援はされます。しかし専門インテリゲンツィアが独立の歴史的役割を果たせるなどとは思いなさるな。世界の改変は壮大で複雑で痛々しいプロセスなのです。その任のためには偉大な階級が必要です。



G・B・ショー by デヴィッド・ロウ

これは、グラッドストーンやブライトがああ19世紀の偶像たる世論の前で敬意に満ち

た身ぶりをして見せているのと奇妙なまでに似ている。H・Gはスターリンに対し、ボリシェヴィキたちが偉大な農民兵士階級により勝利へと導かれたことを指摘することもできた。その農民たちは私有財産について、最も極端な形の農民所有権を唱える人物に従ったのだ。それ以来ずっと、スターリンとその仲間たちはそうした農民たちを駆除して、それを教養ある産業家で置きかえるという大いなる作業に取り組んできた。さて、この方針が被害者の中で知的水準の高い人々に熱烈に支持されているというのは、パラドックスではない。というのも知的プロレタリアの中で、息子の立場が自分の立場からなるべく離れるのがいちばんいいのだと心から賛成しない人物などこの世にはいないからだ。だが普通の日々働くロシア人たちは、他の日々働く人々と同じく、スターリンとその政府が自分たちのためによしとしたものを受け容れるしかない。そしてウェルズが尋ねてもよかった質問は、ボリシェヴィキというのはロシアのクリソルドたちの指導者だったのではないか、だからウェルズが社会的な救済を、献身的で自薦のクリソルドたちによる陰謀に求めたのは正しかったのではないか、ということだ。そしてまたスターリンは、そういう人々が抗いがたい天職を持つ人々、資本主義がプロレタリアの組織的な強奪であると確信した人々、他の山賊行為が打倒されるようにそれを打倒すると無慈悲に決意した人々、この目的の追求のために自分の目先の利益など度外視する人々になると述べた点で正しかったのではないか？ これは明らかにレーニンやスターリンをあらわすものだが、クリソルドやロックフェラーやフォードの描写にはならない。

いずれにしても、それをもたらす人々が使徒たちにせよ、はたまたエネルギーな金たちにせよ、その連中が政治権力を獲得するまでは世界を変えられないというスターリンの但し書きは否定しようがない。また、自分のどんな個人的利益よりも気に掛ける共同的理想がない限り、彼らは自分の権力を資本主義の破壊に使うよりは、その合理化に使うだろうというのも否定できない。ウェルズはそれを恐れてはいない。というのも彼は、資本主義は仕組みではなく混沌だと思っているからだ。彼のまちがいの中で、これに勝るものはない。資本主義は紙の上では、あらゆるユートピアの中で最も体系だって最も徹底的に理由づけされたものなのだ。社会主義が政治的なものとしてまともに考えられるようになるまでは、ド・クインシー、オースチン、マコーレー、効用/功利主義者たちといった人道思想家たちが、資本主義の現実の、そして予想される恐怖をすべて理解しつつ、なおも彼らを支持に結集させたのは、資本主義が私有財産という制度から最適な社会的結果を得るための計画として、最も完全で論理的なものだったからだ。それはいまだに、標準的な仕組みとして大学で教えられているし、いまだにウェルズがそれを勉強し、アスキスやイング並に社会主義には手の届かないところまで行ってしまうというひどい可能性も恐ろしいことに消えてはいないのだ。この問題は実のところ、自動的に特権的な分配が行われる私有財産と、意図的に強制された平等な分配を持つ公有財産との間の対立だ。その問題から逃げる限り、クリソルドは社会主義には役に立たない。ウェルズはウィリアム・モリスを、詩人で装飾家として描く。だがウィリアム・モリスの意義はそんなところにあるのではない。モリスの重要な専門性は、怠惰な資本家たちは「呪われた盗っ人だ」という意見をはっきりと述べていたところにある。そして「呪われた」という用語は、単なる装飾以上のものだ。クリソルドにはその音が見あたらない。だがそれは社会主義においては鍵となる音なのだ。

このスターリンとウェルズの衝突の報告、抵抗しがたい力と不動の障害物との衝突で、見あたらないのはウェルズによるスターリンの描写と彼についての意見だ*。また、スター

リンによるウェルズの描写と彼についての意見もあらまほし。ウェルズはそうした描写が天才的に上手い。だがスターリンもまた辛辣なペンを携えており、議論のわかれる論敵を「その場で」見事に富農(クラーク)と断じてしまえる。いつの日か、その両方を楽しめる日がくるかもしれない。

(*原注：この脱落部分は、ウェルズのすばらしい自伝第二巻に登場する。その中で彼は、スターリンの率直さとよい人柄について立派に公平な描写をして見せるが、マルクス恐怖症に目がくらんで、スターリンの頭脳の強さと歴史的状況の現実的な把握が理解できずにいる――GBS)

一方で、両者が最後までそのちがいを克服できなかったことを、神意に感謝しよう。スターリンはトロツキーを追放し、二つの点で共産主義の新生ロシアカソリック教会の最高祭司長となった。その二つの点の最初のものは、ロシアが十分にでかくて一握りの地上の支配者が牛耳っても、その他世界を相手にする必要はないのだと認識している、自国主義の実務的な政治家だということ(ウェルズは世界国家以下のものでは納得するまい)。第二にスターリンは、その最終目標についてはまったく譲歩するつもりがないが、その手段の点では完全な日和見主義者だということ。彼は二つの印象的な文章でこれをウェルズに告げる。「私はどんな秩序も支持しているわけではない。労働者階級の利益にかなう秩序を支持している」。明らかにスターリンは、仕事をやりとげる人物なのだ。そしてそのためには、必要ならトロツキーと世界革命を目先の仕事から取りのぞくことも辞さない。ウェルズも、その革命なしの世界国家といっしょに、スターリンにとっての現在のアジェンダからは消し去られてしまう。

ウェルズがスターリンに対し、自分が新生ロシアの敵か味方かについて多少の疑念を残したのは残念だったと思う。先週の水曜日にチェスタトン氏は、ポートランドプレイスからの放送で、エドモンド・バークの自由主義がフランス革命によって実地に試されたことでぐちゃぐちゃになったことについて、バークに対する雄弁な譴責を行った。そしてフォックスが自分の立場を捨てなかったことについて賞賛した。そしてそのまったく同じ文章の中で、チェスタトン氏はポリシェヴィズムについて「果てしない汗かき」と、かなり気前のいい表現をしてみせることで、まるでヒナギクの中程の山のようにいきなりアトール伯爵夫人の腕の中に倒れ込んだのだった(これは比喩的な表現だ)。(訳注：すいません、この最後の部分の比喩が何のことやらまったく理解できておりません。ただ前後の文脈からして意味合いとしては、自由主義を奉じつつフランス革命を見て急に保守っぽいことを言い出したバークは根性なしで、一方でチェスタトン氏は保守派論客のくせに、何やらポリシェヴィズムにずいぶん物わかりのいいことを言って急に左派じみてきて、バークに環をかけた根性なし、ということです)

さて、これほど恐れ知らずの評論家が、私有財産分配論として共産主義よりも左派に属すると述べつつ、このようにバーク以上にバーク的なことを言えるのであれば、イギリスでスターリンが信用できる人物などいるだろうか？ 私は昔からロシアでは、「フェビアン社会主義者の中で失脚した善人」として嘲笑されてきた。だが二人の老いばれ超ファビアン的なファビアン主義者、ウェップとショーは、フォックスのように自分たちの意見に固執し続けた。これに対して感傷的な社会主義者たちは、あらゆる方面でスターリンから逃げ出し、聖ペテロのように「この者は知らない」と叫んでいる。スターリンは、外務省では日本帝国主義に対峙する唯一の橋頭堡としてほとんどお気に入りとなっているが、われらの自称社会主義教会や社会党どもは、極度に不足しているイギリスのお金を、満州国や中国の収奪の分け前に預かろうとして輸出したがる資本家たちの暴徒たちを盲目的に手助けして、共産主義を毛嫌いしている。なんとも素敵なクリケットではないか。

ウェルズ氏は、国際連盟知的協力委員会や第一、第二、第三の各種インターナショナル(コミンテルン)の存在を見事に見すごして、そのかわりにPENクラブをロシアに提供する。この提案でロシアは二の句が継げなかった。私はそのクラブの会員だ。そして、次のクラブの晩餐会にスターリンを招こうと提案することで、この会の政治的啓蒙度と満場一致の精神を試してみたいという強い誘惑に駆られているのだ。

4.2 エルンスト・トラー氏のコメント

H・G・ウェルズ氏――偉大な作家として崇拝しており、長年にわたり正義のための最も勇敢な闘士だったのも知っている――は大きな会合において、ソヴィエトロシアでは、作家の知的自由が**完全に**抑圧されていると宣言し、したがって「知的生活がない」と述べた。ウェルズ氏のこの意見は、モスクワとレニングラード訪問中の体験に基づいている。この私も二ヵ月過ごしたロシアからちょうど戻ったところだ。私はモスクワとレニングラードだけでなく、多くの自治共和国も訪れ、その一部は中東の国だった。ロシア人たちは、こうした共和国できわめて強力な精神生活をウェルズ氏に紹介しなかったという間違いを冒した。さもなければ、こんな判断に到達することはなかったはずだ。

私がロシアで受けた最強の印象は、ファシスト諸国では知的自由ますます細かく制限されるようになり、独裁者の命令に奴隷のように従わない作家たちは亡命するしかないのに、ソ連では逆に知的自由は**高まっている**というものだ。ソヴィエト政府がこれまで必要と考えた精神的自由の制限が、大いに緩められつつあるという本物の兆候が見受けられる。

作家会議で政府代表は次のような簡単な宣言を行った。

「ソヴィエト連邦においては、あらゆる作家は好きなことを書く自由を持つが、ダメな作品を書く自由はない」

(実際には、作家はダメな作品を書く自由さえ持つ。そうでないと現代ロシア小説の作品はすべて傑作ばかりになってしまうが、どう見てもそんなことはない)

会議では、パステルナーク、バーベリ、ティコノフ、オレーシャ、エレンブルグといったロシア作家たちも熱烈に賞賛されていた――こうした作家は共産黨員ではないし、活発なプロパガンダも行っていないが、偉大な芸術家なので榮譽を与えられたのだった。議論は高い知的酔員で行われ、「悪意あるプロパガンダ」をめぐるものではなく、文体や形式の問題をめぐるものだった。ジョイスとドス・パソスが議論された。主導的な政治家たちは、報告書の中で古い文学だけでなくもっと現代的な文学も知っていることを示した。これはヨーロッパの政治家についてはほとんど言えないことだ。若手作家たちは、批判者をまったく恐れていないようだ。自分たちの芸術的自由を制限しようとするあらゆる提案に対しては、強硬に戦っていた。

初期の日々のソ連における誤りは、私から見れば、正されつつある。白黒二分法は排除されている。たとえば劇場では、求められているのはマリオネットではなく、強さと弱さをすべて備えた人間だ。ロシア人たちは、ロシア正教会には神々や悪魔の住まう別世界があるが、この世には神々や悪魔は存在しないことを認識している――地方部にさえいない。だからこそモスクワ劇場では、白衛軍の反革命将校が人間的に、共感すらもって描かれるのを見ることになる。ゴーリキーの最新の戯曲では、資本家は単なる悪魔としてではなく、強い人格を持った人間として描かれる。反革命は無慈悲に弾圧されるが、人々は反

革命支持者の一部が、自分の命を捧げる理想主義者なのを認識するだけの洞察力を持っている。

ロシアにおける作家は、社会の継子扱いではなく、むしろ甘やかされた子供だ。別にへつらう賞賛は求められていない。自己批判は歓迎される。そして、仕事をする時間と余裕も与えられている。バーベリは初期の本で、自分が重要な散文作家なのを示したが、7年にわたり何も発表しておない。だがその期間中に国立出版局から先渡し金を受けとり、引退した慎ましい個人である意外に、原稿をせっつかれたことはないという。西欧の自由な出版社で、そこまでしてくれるところがあるだろうか？

個人的な体験を付け加えておきたい。私はバカールとギャバジンたちの国を訪ねた。その大統領カルミコフは、傑出した人格の人物だったが、そこで半年か一年過ごすようにと招いてくれた。「ここで暮らしてあたりを見回してほしい。我々の人民について書きたくなるかもしれませんよ。あなたに仕事を無理強いできないのは知っている。一年後に何も書くことがないとわかってても、何かを学んだことにはなるでしょう。それで十分です」。

15年前には、こうした人々の98%は文盲だった。今日では、読みも書きもできない人はたった2%だ。図書館には、ロシアや外国の作家の作品がある。ちなみにいちばんよく読まれている作家の一人が、H・G・ウェルズだ。ソ連に精神生活があるという何よりの証拠だ！

同じ現象が、ソ連の多くの古い自治共和国で見られる。何世紀にもわたりツァーたちに抑圧され、原語が禁じられてきた人々が、集中的な労働により自分たちのために独自の学校や大学を作り、独自の文学と芸術を作っている。文化生活はどこでも抑圧されてなどいない。どこでも奨励されている。どこでも霊的価値は破壊などされていない。どこでもそれは人々の所有物となった。

これはブルジョワ社会の霊的な価値についてすら言える。ほとんど古典のルネサンスとっていいくらいだ。プーシキン、ゴーゴリ、トルストイ、レーンモンツフが何百万人にも読まれているだけではない。ディケンズ、スウィフト、バルザック、フローベールにも大きな関心が向けられている。他の国では読者が不十分なのに、ソ連では巨大な刊行物が倍増、三倍増していない唯一の理由は紙が不足しているからというだけだ。

ウェルズ氏がロシア作家会議に参加してくれていればと思う。そうしたら、ロシアで建設されているのは新しい工場や新しい町だけではなく、新しい人間がそこで育っており、ファシスト諸国とは根本的にちがう種類の人々なのだというのがわかったはずだ。ファシスト諸国では知性が嫌われ迫害されるが、ソ連では全国の労働者が、過去と現在の偉大な文化的価値との生きた関係を実現するため、生活の知的基盤を探そうと苦闘しているのだ。

作家のひどい孤立は廃止された。作家は人民と密接なつながりを持って暮らし、人民は作家とその作品との密接なつながりを持っている。これは会議に参加した労働者、農民、兵士たちの無数の代表で示されただけでなく、会議における向上についての熱烈な議論でも示された。私もそうした議論にしばしば参加した。

イギリス PEN クラブからの手紙が会議で読まれなかったのは残念なことだ。私としては、そこに意図的な悪意があったとは思わない。次の PEN 大会では、ロシア代表団がソ連の活発な精神生活について語ってくれるはずだ。そしてそれをだれよりも喜ぶのは――ウェルズ氏自身となるだろう。

4.3 ケインズ氏がショー氏に応える

ショーとウェルズのちがいは何か？ それは聖職者と科学者のちがいだ。ショーは、自分も私たちも、すでに知るべき事はすべて知っており、私たちとあるべき世界との間に立ちはだかっているのは、私たちの嫌らしい気持だけなのだと信じている。彼はこの仕組みの中で、知識が所与だとして、気持、情熱などが変数だと思っている。だがウェルズは、気持が所与だとして、知識が変数だと考える。彼にとっては、事態の一変を引き起こすのは知識の変化だ。ウェルズは探索者、追求者だ。だがショーは、いまやあまりにドグマ至上主義者になってしまい、いまや彼にとっては、その熱意の対象がスターリンだろうとムッソリーニだろうと関係ないほどだ。猥下があればほど温厚で心が広くなければ、ローマ法王でもほめそやすだろう（『聖女ジャンヌ・ダルク』で観た通りだ）。

（訳注：ショーは、ムッソリーニが反資本主義だというだけで彼を支持し、ファシズムを応援している。）

ここから、スターリンとのインタビューの雰囲気について、ショーの見事なまでに悪意に満ちた誤解が出てくる。私があのインタビューについて得た図式は、蓄音機と格闘する男、というものだ。再現性は見事だし、録音は一字一句の誤りもない。そして哀れなウェルズは、レコードから針を無理にはずして、その肉声を聞く機会をもらえたと感じている――空疎な希望だ。ショーは、もてなし役に対してはそれが蓄音機だろうと礼儀正しくすべきだと哀れなまでに意識していることを示す、ウェルズのちょっとした気取りをからかう。そしてウェルズがよい聞き手ではないと非難する。だが実は、ウェルズの弱点は、彼が蓄音機を我慢できないということだ。彼は人生で最も興味深いインタビューを楽しんでいる――それなのにとんでもなく退屈している。彼は必死で抗う。下手クソに無理強いしてみる。だが無駄だ。最後まで再現性は見事だし、録音は一字一句の誤りもない。

ショーは、ウェルズが「スターリンに教わるためではなく、自分がスターリンに教えるつもりでやってきたのだ」と書く。これほど事実とかけ離れた話はない。その正反對だ。ウェルズの問題は、彼がいまだかつて他人に与えられる満足のいく指示を見つけれられていないということなのだ。彼はスターリンに提供できるものが何もない。もし蓄音機に耳があったなら、スターリンはそれを指摘したかもしれない。

ショーとスターリンには、単なる知的熟慮ですら解決策に何か貢献できるという可能性も少しは認めてほしいとお願いしたいところだ。そして、彼らの伝統的な解釈が現在の事実と整合していない可能性も考慮してほしい。ショーは、経済学者の「いまだに、標準的な仕組みとして大学で教えられている」ものについて語り、「ド・クインシー、オースチン、マコーレー、効用/功利主義者たちといった人道思想家たちが、資本主義の現実の、そして予想される恐怖をすべて理解しつつ、なおも彼らを支持に結集させたのは、資本主義が私有財産という制度から最適な社会的結果を得るための計画として、最も完全で論理的なものだったからだ」と書く。私はこの一節に共感する――見事な表現だ。だがショーは、自分とスターリンもまた、アスキスやインゲと同じくらいその標準的な仕組みの知的支配下に完全に入っているのだということを忘れていた。この仕組みは二つの集団を生み出した――それが正しくて不可避だと思った人々と、それが正しいが耐えがたいと思った人々と。19世紀には、第三の学派は存在しなかった。だがいまや第三の可能性がある――それが正しくないという可能性だ。ドグマ至上主義者にとってきわめて頭にくる発想――この発想でだれよりも苛立つのはスターリンだ――だが、科学者には実にホッとさせる考

なのだ。

私たちに脱出を可能にしてくれるのは、この第三の選択肢だ。標準的な仕組みは知的誤謬に基づいている。その誤謬を消し去って、それにかわるもっとしっかりした経済理論（これは当然ながら、電気屋の実務的な仕事に電気理論が適用できるのと同じように私たちの経済問題にも適用できる）を据えれば、ショーとスターリンが予想しているものとは見通しがまったくちがってくる。私たちの火急の仕事は、経済学者たちが他の科学者たちと席を並べられるようにするための、新しい標準的な仕組みを考案することだ。ウェルズ独得の才能は、現代の科学者が彼に提供する可能性と最終的な含意について創造的に把握する能力だ。同時に彼は、社会的、政治的な夢想家だ――あるいは歳を取るにつれてそう



J・M・ケインズ by デヴィッド・ロウ

なっていた――その夢想ぶりは、技術や数学面よりはるかに強い。プラトンの学派であって、ピタゴラスやアルキメデスの学派ではない。ウェルズの不運は、経済学者が何も新しいものを提供しなかった世代に生まれたことだった。彼の想像力が飛び立てるような発射台を、経済学者たちは何も与えなかった。だがウェルズはそれでも、自分の頭が未来に属し、ショーとスターリンの頭が過去に属していることを十分にわかっているし、それは正しい理解なのだ。

古い理論はまちがっているにとどまらない。世界の事実は変化する。ショーとスターリンは、いまだにマルクスが描いた資本家の世界で満足している。それはマルクスの時代にはかなりののもっともらしさを持っていたが、75年たった現在、現代社会の急変とともにもはや跡形もなくなっている。彼らは昔の資本主義をふりかえっているのであって、それがこれからなろうとしているものを見てはいない。社会のある形態から別の形態へと、めまぐるしい勢いで進化が続いている社会経済の領域でドグマ重視に陥ると、そうになってしまう運命になる。19世紀後半には、資本家たち――つまり都市の指導者と産業指導者たち――が権力を持っていたとは言えた。社会の経済的なまとまりは、その露骨なまでの欠陥にもかかわらず、全体としてそうした連中に適合していた。その連中が権力を握っている限りは、他の領域からやってくる大きな変化にうまく抵抗し続けるという主張も成り立った。また1870年には、平和的な発展プロセスを通じて権力がその連中から移行するところを想像するのはむずかしかった。実際、その後一世代にわたり彼らの力は増大した――おもにそれに先立つ貴族と地主レジームを犠牲にしてのことだった。ヴィクトリア女王は、太陽が沈んだ（あるいは沈まない）最も資本主義的な帝国の女王として死んだのだった。

もしショーがヴィクトリア女王以来の新聞を読んでいたら、そうした形の社会を様々な出来事が破壊したのがわかっていたはずだ。主要な原因の一つは、森の巨人には直接の後継者がいないと定めたある種の自然法則かもしれない。都市の指導者や産業の親玉たちは、その栄光の頂点では壮絶な子たちだった。そしてやがて時間がたつにつれて、それがジジイどもになり、その視野は鈍ったがその根性と意志力はそのままだった。同じ種子の若木が生えても、その陰では生き残れなかった。歳を喰ってその巨人共が倒れたら、その下の森林に生えていたのは別種の木だった。そして他にもいろいろ起こった。資本家たちは心の強さの源泉を失った――その落ち着き、その自信、その抑えがたい意志、自分の美しさと社会のよさの疑問の余地なき価値についての確信を、彼らは失ってしまったのだ。もはや寄り添なき存在だと天は知っている――せいぜいが哀れな善意のクリソルドだ。レヴェルストーク卿一世、ロスチャイルド卿一世、ゴッシェン卿一世、サー・ロシアン・ベル、サー・アーンスト・カッセル、プライベートバンク経営者、商船所一家、巨大商人、世界をまたにかけの建設業者、バーミンガムやマンチェスター、リバプール、グラスゴーのたたき上げの男爵たち――いまいづこ？　そういう人々はもういない。その事務所の使い走り坊やたちが（給料をもらって）彼らの霊廟から指示を出している。

だから様々な理由で、時間と株式会社と公務員が、静かに給与階級を権力の座につけた。プロレタリアートはまだだ。だがサラリアートはまちがいなく権力を握った。そして、そこから大きなちがいが生じる。

さらに19世紀は、いろいろ恐ろしいこともあったが、権力の座にある人々には居心地がよかった。彼らはそれが気に入っていた。マルクスは、そうしたフーヌイどもを引きずり下ろすには、無数のリリパット人たちを組織して、みんなに毒矢を持たせるしかない

と思ったかもしれない。だが今日の混乱はだれの得にもならない。今日の問題はまず、よい助言をまとめて、そして善意の人々にそれがよい助言なのだと納得させることだ。ウェルズが正しい答を見事に発見したら、世間はそれをがぶ飲みすることだろう。プロレタリアートよりもサラリアートがまっ先に食いつく。新しい方向性へのすさまじい抵抗などない。リスクは逆方向へのものだ。社会がその困惑と不満の中で跳ね回るうちに、もっとひどい状況に陥ってしまう、というものだ。革命は、ウェルズが言うように、時代後れだ。というのも革命は個人的な権力に抗してのものだからだ。今日のイギリスでは、だれも個人的な権力など持ち合わせていない。

だが、スターリンは安心していい。ここまであれこれ言ったものの、私は共産主義の真の強さにはまだ触れていないのだ。表面的には、共産主義は経済問題の重要性をすさまじく過大評価している。経済問題は解決がそんなにむずかしくない。この点については、私に任せてもらえれば、ちゃんと面倒を見よう。だが解決しても、私はたぶんあまり感謝もされないだろうし、またそれに値するものでもない。というのも、その背後にある真の問題は、以前とはまったくちがうもので解決策も前とはずいぶんちがうのだということを好評する以上のことをするわけではないからだ。根底のところ、共産主義はもっと深く、もっと真剣な源から強さを引き出している。経済状況改善の手段としてそれが提示されたら、それは私たちの知性に対する侮辱だ。だがそれが経済状況を悪化させるための手段として提示されているということこそ、その巧妙でほとんど抵抗しがたい魅力なのだ。

共産主義は、最適な経済産出を組織しようとする 19 世紀の失敗に対する反動ではない。それは、それが収めたそれなりの成功に対する反動なのだ。それは経済福祉の空疎さに対する抗議であり、人々みんなの内側にいる、他のあらゆる価値観に対する禁欲主義者へのアピールなのだ。ウェルズがモスクワをのぞいてみたいと思ってしまうのは、ウェルズの中にいる司祭のせいだ。その司祭は科学者によりまるで消滅させられたりはしていない。経済学者をその居場所たる地中のどこかに埋めてしまおうという大義にはせ参じるのは、世界で最も高貴な老司祭であり最も非科学的な人物たるショーだ。理想主義的な若者が共産主義を弄ぶのは、現代においてそれが彼らに感じられる唯一の霊的なアピールだからだ。だが共産主義の経済理論は、彼らの気に障るし不快にさせる。ケンブリッジ大学の学部生たちが、ボリシェヴィ世界への不可避な旅に乗り出すとき、そのすべてが嫌悪を催すほど不快だと知って幻滅するだろうか？ まさか。それこそまさに彼らの求めているものなのだ。

だから、我が偉大なる老教師たるショーとウェルズの両方に愛情をこめた敬意を送ろう。私たちのほとんどは、生涯にわたりこの二人の元へ通学したのだ。一人は神学の教官であり、一人は科学の教官だ。だが唯一残念なのは、独自の分野で彼らに匹敵する存在となる三人目がいなかったことだ。その教官に、人文学と芸術を教えて欲しかったところだ。(訳注：この最後「人文学」とあるのは humane letters。見方によっては、人道的な文章。つまりケインズはここでショーに対し、もうちょっと言い方考えたらいいが、とたしなめているわけ。)

4.4 ウェルズ氏が答える

編集子は、スターリン氏との会話をめぐるこの議論に何か付け加えたいことはあるかと言う。バーナード・ショー氏に答えようか？ だがバーナード・ショー氏に答えられる人などいるだろうか？ 彼は習慣と自らの意図により、理不尽な脈絡なしの種 c 王という女

性の特権を身につけた。華々しい歪曲と狡猾なほめかしが奔流のように流れる。こちらは肩をすくめるしかない。私はクリソルドで、私はボンデレヴォで、私は私自身以外のあらゆるものにされる。意地悪、空疎――紳士などではないというわけだ。それでショーが満足なら、勝手にするがいい。彼はそのすべてを何度も実に美しく述べている。そしてまた、私が話題を変えてあちこち話を切り、臆病な逃亡者で受刑者だと述べる――そしてヘタをすると、それですら彼は自分で信じ込んでいるのかもしれない。だがもっとマシなことが書けたのに、なぜ私の人格についてこんなことを繰り返したのか？ 私はスターリンと会話をしたし、ショーとレディ・アスターも彼と会話をしているが、その別の出会いについての公式報告があるとは寡聞にして知らない。それについてスターリンの見解は聞いたが、それは好評はできない。比較を行って会話に彩りを添えることさえできない。三人は階級闘争の発想をめぐって意気投合したのだろうか？ おそらくそうなのだろう。ショーは話を聞いただろうか？ 彼は私がスターリンの言ったことを聞いていないと言うが、ショーがスターリンの言うことを聞いたとはだれが信じられるだろうか？ スターリンは口をはさむ機会をもらえたのだろうか？ その会話すべてについて、ショーはかなりショーらしからぬ沈黙を保っている。

ギャルズワージーのPENクラブについてのショーのせせら笑いは、いささか下品だと私は思う。PENクラブは小さく野心的な組織で、30年前のフェビアン協会に比べて四倍も会員がいて、財務状況もよく、有名だ。だが気取りとは無縁だし、言論の自由のために戦うし、ギャルズワージーが死んでからこの協会の役にたてたことを、私はありがたく思っている。PENを擁護はしない。このどれについても自己弁護はしない。せいぜいが、彼とウェッブがああクリフォード・インでのすばらしい日々「固執し続けた」と称するその「意見」というのがどんなものだったと思っているのかについて、おもしろいなあとと思うだけだとはほめかすにとどめておこう。どうやらその意見とやらは、彼の老いぼれ頭の中ではいまも勝ち誇って跳ね回っているらしい。そして、自分のまわりで何が起きているかについて、理解は完全に排除されているらしい。

私はまちがいなく、自分の精神生活を何か意見に固執するような活動とは見ていない。そんなことをするくらいならすぐに泥にまみれたほうがマシだ。だがそれを、絶え間なく検討にさらすような活動だとは見ている。私はフェビアン主義やその蜂起的な敵対物たるマルクス主義――そのどちらもショーは、あの古きすばらしきフェビアン協会の日々に同時に鵜呑みにしたらしい――の双方を、人間の叡智の集結物として見なす。私は時代とともに変わった。生まれつつあった自分の思想を『予見 (Anticipations)』と『神々の糧』で初めて提唱して以来、私は現代の事実についての根本的な集団をめぐる自分の認識を、着実かつ漸進的に発展させてきた。人間の条件の規模と範囲の変化、労苦の克服とそこから生じるはずで、生じるべき思想、習慣、制度の変化などを考えてきた。ショーはそのご自分の「意見」とやらにあまりにご立派にこだわりすぎたので、私が『自伝』で述べた誠実で、愛情に満ちた完全に敬意あふれる教育的な活動にも関わらず、彼はその規模の変化がどういう意味を持つかについて、最も基本的なところすらまるで把握できていないし、いまや今後も決して把握できないのではと思ってしまう。私は確かに彼の言うように、以前に聞いたことに耳を傾ける傾向があるのかもしれない。だがあらゆる知的な目的において、彼の敏感なまでに防衛的な自己中心癖と、すべてをドラマ仕立てにしようとする彼の傾向はあまりに壮絶な騒音をたてるので、彼は実質的につんぼも同然だ。

この規模の変化こそが現代の出来事における最も重要なものだという着想は、きわめて

広範かつ実り多いものなので、あの階級闘争という思想を構築する貪欲、疑念、嫉妬、恐怖、憎悪、誤解の奇妙なごった煮は、魔術に対する恐怖と同じくらい動機づけの仕組みとしては古くさいものとなっている。だが魔術への恐怖もまた、大量の人々を善意の暴力ととんでもない不正へと狩り立てたこともあるのだ。スターリンですら、その階級闘争にしがみつくにあたっては、職権を使ってかなりの努力を必要としているし、戦術的な目的からショーもそれを認めているが、それはなぜそんなやり方で物事を進めてはいけないのかについて、まったく理解できないからだ。みんな大なり小なりそういうことをやるが、それは実に残念なことだ！ 私はこの階級闘争という妄想が着実に薄れつつあるのを彼が気がつかないとは、まったく信じられない。人間精神は、それが擁する人々よりもはるかに大きく、最大級の創造的な実現に向けて進んでおり、この希少性の時代からのいがみあう遺物は、それがまだ広がっているところすら、どうでもよいものへと霧散する。現代の可能性のインスピレーション実現、現代の現実の混乱を突破しつつある巨大な約束の実現は、こうしたせせこましいひけらかしや、相互の愚弄やけなしあいなど惨めなものに思わせる。そしてそれは事実、惨めな代物なのだ。

未来の世代からすれば、私たちはなんと哀れでいじけた連中に思えることだろう！ ショーも私も人生の終わりに近づいているのに、お互いにできることといえば、この個人的な罵倒ごっこだ。六十五歳を過ぎたら、競争したり個人的に張り合ったりするのはバカげている。ゆっくりと、来たるべきものの姿がまわりではっきりしつつある。人類の新しい生き方が開けつつあるのは明らかだ。大量の人々がそれを漠然と感じつつあり、やがて大量の人々がそれを鮮明に理解するようになる。現在ではそれは可能性だ。明日にそれは明確な実体となる。何千人もが貢献しており、だれも先へ踊り出て「この運動は自分のものだ」などとは言えない。伝統、習慣、嫉妬、愛国心、偏見、自衛的な悪意とうぬぼれに目がくらんで、我々過ぎゆく世代はほとんど嫌々ながらのように、そちらのほうに暗中模索する。私に対するショーの攻撃と、私自身の抑えの効かない憤りは、もうそろそろ我々が退場すべき時間なのかもと、不穏ながらも考えさせるはめになった。私たちが想像したいよりもはるかに多くのことが、謙虚な若者たちによって行われているのかもしれない。

だがそれでも、これをもう少し続けたいようには思う。せめてこの陰鬱な階級闘争というドグマの出口のところで「お先にどうぞ」と言うだけのためにでも。

4.5 G・B・ショーが続ける

静粛に、紳士諸君、静粛に頼みますぞ。国際マナーをわきまえて！

『ニュー・ステイツマン・アンド・ネーション』の編集者に、ウェルズとスターリンのインタビュー報告についてコメントをしると頼まれたとき、私は彼がウェルズを「攻撃」しると頼んでいるのではないことを十分に理解していた。これは公共的な機会であり、全ヨーロッパ的な機会だった。というのもこの両者が持つ名声のおかげで、二人の会合は単なる痴話げんかや固有の怒りっぽさの雰囲気とは縁遠いものになっているからだ。

この状況を少し考えてもみてほしい。こちらのロシアは、私たちが無為に失業保険で先送りしようとし、軍備で脅かし去ろうとし、貿易復活の祈りで消し去ろうとしている問題をすべて解決している。それを解決するなかで、応用政治科学での最も刺激的な興味と決定的な重要性ある政治的発見が行われている。その最大のものの二つを引用させてもらおう。

まず、かのロシア政治家は本当に自由な国——つまりその人民に帰属し、公德心を持ち能力のあるどんな集団であれ、議会に個別法案を求めたり地主や弁護士に巨額の支払いをしなくても、どんな公共サービスでも行える国——においては、この自由に対する反応は、実証なしに考えられるどんなものよりも大きい。ロシアはたった十年のうちに、イギリスでなら百年かかるか、ヘタをするとその支持者が即座に精神病院送りになるかもしれないような社会変革を実現できたということだ。政治的な力としての「人民」の不可欠性をあれほど深くスターリンに印象づけたのは、大衆の中の組織能力と統括能力のこの余力が明らかになったことなのだ。パスフィールド卿、元シドニー・ウェップは、存命中の工業民主主義における最も科学的な探求者だろうが、即座にこの発見をみきわめて、即座にそれについてすべて語ってくれるはずだ。

第二の発見は、同じ条件の下で、政治的カオスの中からボトムアップ型で憲法が形成されてゆくということだ。最近の序文で私は、共産主義が粗雑な独裁主義をも生み出さず、同じく死刑執行人が疲れ切ってストに入るまでギロチンを盲目的かつ必死で動かし続ける粗雑な公共安全委員会も生み出さず、共通の信仰と、清貧と禁欲の誓いで結ばれた、民主的な教会兵と異端審問官を組織する自己献身的な民主的司祭たちを生み出すのだということを示した。ウェルズ的な用語を使うなら、リベラル派と急進派たちが、人民のための人民による人民の統治という曖昧模糊とした夢で酩酊しているときに、ウェルズ氏の待望するサムライたちを生み出すのだ。ロシアは人民のための人民による人民の統治を生み出し、それを行うのは人民の状態に十分に配慮しているので、その仕事自体のために、民主主義を基盤として全面的な自主性に支配されて献身する男女たちなのだ。共産主義はウェルズ氏の夢を実現し、それを夢の国から現実に取り出して、全世界が真似られるようにしている。

さてスターリン自身を見てみよう。彼は「君主でも同僚でもなく」、王でもなく、司政官でもなく、独裁者でもなく、首相でもなく、大司教でもなく、色つきシャツの若者が執行する敬礼を受ける権利もなく、ヒエラルキーの最高統制機関の書記でしかなく、満足な仕事をしなければ5分でクビになる存在だ。この地位を彼は、適者生存を通じて達成し、そして新文明の生まれの苦しみに伴った中でも、史上最も啞然とするような大波の年月を通じてそれを維持し続けたのだ。彼は独得な経験を持つ政治家であり、それに比べれば西洋列強の支配者は、空疎な台詞やでっちあげの歴史、古びた定型作業により自動的に邪悪な仕組みにしがみついているだけで、おんぼろになった蠅人形のヨタつく行列にしか見えない。スターリンとのインタビューの特権は、実に大いなる栄誉であり、最も高名な社会哲学者なら誇りに思っている機会だ。

この特権がウェルズに与えられたのは、まったく正当なことだ。そして我らがH・Gはその機会をどう使ったのだろうか？ 彼はクレムリンに、のこのこと乗り込んで、実質的にはこう言ったわけだ。「スターリンさん、あんたは二流の人物で、その二流の頭に階級闘争とかいう世迷い言をつめこんでいるようだが、そんなものはうちのPENクラブの仲間たちは一瞬たりとも聞きたくないんだよ。さあオレが『ウィリアム・クリソルドの世界』の広大な可能性について説明してやるからよっく聞けよ、うんぬんかんぬん」

私はH・G・ウェルズに、それでおしまいにしていいのか、と尋ねたい。彼がいくら誠心誠意、そんなふうではなかった、そんなつもりはなかったと抗議しても無駄だし、私が彼の雄弁なペンを向ける通りの嘘つきでスノップのすべてであっても関係ない。というのも、この私のパラフレーズはまさにあのインタビューそのもののものだし、そしてH・G・

ウェルズ氏以外の人が読めば、みんなそういう理解をするだろうからだ。スターリンもあんなふうに思ったはずだ。というのもスターリンは、ウェルズを天才として認識しているし、能う限り最高の賛辞を与えてはいるが、イギリスでだれでも知っていることを知る由もないからだ――つまり、H・Gは浜辺に他の小石があるのをまったく容認できないという点で、カール・マルクスそっくりだ、ということだ。ウェルズは自国でなら、自分の欠点を完全に求め、みんなをその欠点について笑わせれば批判をすべて帳消しにできるし、それでだれも彼を悪く思ったりはしない。だがこれは、イギリス的な親密さをあてにはできない機会なのだ。そして正直言って、ウェルズはスターリンに謝罪すべきだし、そのためには私の発言から好きなだけ使ってくれてかまわない。

いまこの瞬間というのはイギリスの言語において、スターリンを最も突出した配慮の対象として扱うだけの、常識的な外向的まともさに強い主導権を与えるべき時なのだ。もし外務省に三文ほどでも先見の明があり、多少なりとも東洋の状況を多少なりとも把握している人物がいるならば、次回の皇太子の外交訪問はソ連経由となるはずだ。皇太子なら詩的な意見はどうあれ、ふるまい方をわかまえてはいるはずだ。ロシアン卿とアスター卿およびそのご夫人や、ましてこの私は、文句なしのふるまいをした。スターリンに、親しい皇帝に対するような接し方をした。ウェルズはこの巨人(アトラス)を訪問するときには、そのつまらない無責任ぶりをアトラスハウスに置いてくるべきだった。

私は彼に対して最後に改めて、ロシアとスターリンという言葉が今日持つ重みを本当に理解していることを示す一言を最後に述べるよう訴える。

メイナード・ケインズについて言えば、スターリンについての蓄音機という評に笑ってしまったことは認めよう。スターリンは気にするまい。かけ算の九九ではだれしも蓄音機になる。そしてケインズ氏は、我々の大学が実にショッキングな古い蓄音機でしかなく、すり切れて古びてしまったレコードをひたすらかけ続けているだけだということを十分ご存じだ。だが私が「科学的」でないとかいうたわごと(これはほとんどの論争屋が個人攻撃で使う用語になっている)は、受け容れられない。完璧なる科学的な人物というのは、どんな手法を使おうとも最後に必ず正しいことが示される人物だ。そんな人間は今もこれからは存在しない。それがいないなら、最も科学的な人物というのは、最も頻繁に正しいと示される人物のことなのだ。

4.6 さらにコメント：本誌への投書

4.6.1 ドーラ・ラッセルより：ケインズがそんなに正しいならなぜその政策が実施されていない？

拝啓 我が国の有力な知識人、ウェルズとショーとケインズが、「蓄音機」たるスターリンの不協和音の音楽にあわせてバレエを踊る様子は、一つならずの意味で啓発的なものです。確かにそれは、なぜケインズ氏の言う理想主義的な若者が、共産主義の霊的な魅力に惹かれるのかをある程度は説明してくれます。その若者たちの教官が、共産主義の経済学にある欠陥をあらわにしてくれるのに、かれらは共産主義に走るわけです。この三人は全員、知的論争と科学的な研究こそが、進歩と改革の王道なのだという大いに尊敬されている伝統に連なる人々です――特に私の学部生時代のケンブリッジ大学ではこれが重視されています。あの幸せな時代における最大の敬意は、頭が鋭く感情がクールなので、論争で

どちら側についても同じくらいの説得力を持って議論できる人物に向けられたものです。ショー氏は、長生きすればそれに比例して賢くなるが情熱は死ぬと語りました。ウェルズ氏は、ご自身の小さな船をまだ階級闘争の洪水に浮かべつつ、周辺で苦闘している多くの人々に対して、あなたたちが溺れているのは幻想なんだ。なぜならその水を放水させたりせき止めたりするだけの頭脳と意志を持つ人がたくさんいるからだ、と続けます。ケインズ氏は明日にでも私たちの経済問題を解決できるそうで、恐ろしい資本家たちは怯えて改心し、だれかに物事を正してもらうのを大喜びで待っているのだと保証してくれます。

これらすべてを是非とも信じたいところです。というのも、革命の見通しなど本気で心待ちにできる人はいないも同然だからです。しかしそれでも、その千年王国はどうやって実現するのかと聞きたくなるのは人情でしょう。西欧で、左派の意見が多数派になろうとしているように見えたあらゆる国は、すぐに右派からの革命に飲み込まれてしまいました。ケインズが今日のイギリスについて述べるように、そうした国々には「新しい方向性へのすさまじい抵抗などない」どころか、大衆は何か新しいものを望んでいました。だったらなぜ、そのまともで困惑した資本家たちは、ケインズ氏に経済の仕組みに対処してもらわずに、拷問や機関銃を使うのでしょうか？というのも、これまたケインズ氏がその頭脳で実に正しく見通すが、ひょっとすると心では見通していないように、資本家たちは他人の個人的な権力の増大に反対し、自分の権力を守ろうとしていたからなのです。

今日のイギリスでは、だれも個人的な権力など持ち合わせていない（ケインズ氏の言葉ですが強調は引用者）。地主たちは、銀行家たちは、軍需企業の社長は、弁護士は、BBCの親玉やマスコミは権力を持っていないのでしょうか？だれも阻止する力を行使していないなら、なぜケインズ氏が描き上げた新しい経済政策を明日にでも採用できないのでしょうか？経済学者としてケインズ氏は、みんなの価値観がいまのようなものである以上、あらゆる個人の社会的権力の尺度は、銀行預金や信用なのだということは十分ご存じのはず。少量買って現金払いの人物は、月次、四半期単位でツケにできる人物よりは権力がないのです。予備費や広告費の資本がある人物は、貧しいライバルよりは事業を軌道に乗せやすいのですし、委員会やクラブにも選出されやすいのです。相続財産は、賃金労働者には不可能な異質な形で暮らし、考える力をもたらしめます。モーズレーは共産党の指導者よりも権力があります。それは財務的な後ろ盾があるので、国家に催眠術をかけ、反対者には与えられない保護を手に入れられるからです。

人々にもっとお金をあげれば権力も増す、というのが労働組合主義者の主張でした。ある程度まではその通りですが、金持ちに与えられるものが減らないかぎり、それにも限界があります。お金のフェティッシュは残り、そして共産主義者が破壊したいのは、そのお金のフェティッシュなのです。西欧の社会主義者たちがこの原理や価値の問題について盲目であるために、ファシストたちが共産主義の霊的な稲妻を盗み去るときに、彼らはボーリングのピンのように倒されてしまうのです。

1920年に、まったく政治に関わりの無いオブザーバーとして、私はロシアにでかけて、ロシア革命のパラドックスはその狙いがまず霊的なもので、経済は二次的でしかなく、ロシアと西欧のちがいは、私たちが物質的繁栄によって人道的なよい生活へと成長できると信じているのに対し、彼らは人間の関係についての信念が先にきて、経済構造はその上に構築すべきだと考えていることなのだ、という論説を書きました（だれも印刷してくれませんでした）。ウェルズ氏――当時の私の知的リーダーの一人――は同年にロシアに出かけましたが、この論点を完全に見逃して、カール・マルクスのもじりもじゃヒゲについ

ての軽薄な論説ばかり書いていたので私は驚きました。私は当時、ロシア人のほうが正しいのではと考えましたし、いまやそれが証明されたと確信します。人々は、自分が**信じられる**ような財産についての法や習慣、労働者としての他の人々との関係、個人の社会との関係、男性の女性に対する関係、親の子供に対する関係が欲しいのです。それをマルクスに倣って福音と呼ぶかどうかは、ほとんどどうでもいいことです。私たちは自分の社会を信じていませんが、ご立派な学術的訓練を受けた私たちの多くは、他の社会を信じるには疑り深すぎるのです。

少なくともある一人のケンブリッジ大哲学者は、知性は欲望の主ではなく僕なのだと述べ、個人がやりたいあらゆる良いことや悪いことについて、もっともらしい口実を見つけるのが知性なのだと言っていたものです。言い換えるとですね、ショーさん、叡智では情熱もそれなりの役割を果たすのです。そしてウェルズさんにケインズさん、あなたたちや、あなた方ほどではないがその似たような私たちは、本当に私たちが重視する特権の多くが必然的に奪い去られるような新しい社会を、本当に**求めている**のでしょうか？ それとも 1917 年以前は私たちみんなにとってそうだったように、楽しい学術的な論争のネタにそれをとどめておくことをお望みなのでしょうか？

ドーラ・ラッセル

(訳注：ドーラ・ラッセルは当時有名だったイギリスの作家、フェミニストで、社会主義支持者、バートランド・ラッセルの二番目の妻)

4.6.2 H・G・ウェルズより：もうショーの相手はしてられない！

拝啓 ショー氏は、私がそれでおしまいにしていいのか、と尋ねる。答は、**彼について**はこのままでおしまいにする、というものだ――勝ち誇って手をバタバタさせつつ、だがひょっとするとこっそり不安を抱きながら。彼は、私がクレムリンに「のこのこ」入って行って、それに対して含意としては彼とレディ・アスターは、最大限の優雅さを持って、闊歩、遊泳、しのびこむ、踊る、滑る、スケートする、飛び込む課何かして、何の記録もない形で、何やらお高い帝国様式で言葉を交わしたわけだ。私のスターリンとの会話について、あの戯作が本物だと思うなら、そう思っておけばいい。公式の報告はすでにある。あの手のものは彼の心のままに任せておこう。ショー以外にだれがそんなものを気にする？

また貴誌のマルクス主義投書子やショーが要求するような具体例だのほとんど関係がない事例だのの子供めいた探索という、ややこしいおとぎ話に話を拡大するのも意味はないと考える。ショーは（その反ウェルズコンプレックスの目的のために）一時的なマルクス主義者になり、現在の人間滑動における階級闘争的な解釈の、むき出しの馬鹿らしさを隠そうとしているのだ。その馬鹿らしさはむき出しのままだ――そしてそれは、創造的な活動の邪魔になるのであれば、そもそも無視して構わないものでしかない。

H・G・ウェルズ

ケインズより：私の政策はもう少しすれば広まるよ！

拝啓 ドーラ・ラッセルは「だれも阻止する力を行使していないなら、なぜケインズ氏が描き上げた新しい経済政策を明日にでも採用できないのでしょうか？」と尋ねます。それは、私がまだ専門家や一般人を、私が正しいと納得させられていないからです。もし私がまちがっているなら、これはいいことでしょう。でももし私が正しいなら、両方を説得するのは時間の問題でしかないと私は確信しています。そして両者が納得したら、経済政策も、いつもの遅れはあるますが、それに従うでしょう。

これが重要な点です。よい方向への変化は、その変化がよいと知りつつも利己性のために抵抗する邪悪な人々が阻止しているのでしょうか？ それとも、どこに叡智があるかわからないから阻止されているのでしょうか？ 階級闘争一派は、やるべきことが十分わかっていると信じています。そしてそれをやりたいと思う貧困な善人たちと、利己性のためにそれを阻止しようとする邪悪な金持ちとに世の中は別れているのだ、と思っています。そして、その邪悪な金持ちをその座から追い落とすには革命が必要だ、と。私は別の見方をしています。私は、何をすべきか解明するのはとてもむずかしく、それを知っている（または知っていると思っている）人々が、その正しさを他人に説得するのもきわめてむずかしいと思っています。ですが、新しく未消化なときには難しくわかりにくい理論も、時間がたてばだんだん易しくなるのです。

たぶんバーナード・ショーが圧政者を好むのは、彼が主に説得の難しさを思い知りすぎているせいではないかと思います。自分の政策を採用するよう独裁者を説得するほうが、民主主義を説得するより容易なのです。その通りだとは思いますが。でも民主主義の説得を困難にしているのは、利己性ではありません。

この国では今後、左派が普通に権力を握るでしょう。労働党は常に多数派となるでしょう。但し何かがおきて、理性的で無私な人々が、労働党が本当に正しいの蚊疑問視するようになったら別ですが。もし彼らが、いつか、理性的で無私な人々に自分たちの正しさを納得させられれば、そしてその場合に限り、利己的な資本家たちが彼らの邪魔をする力など、無視できるものにしかなくなるのです。

J・M・ケインズ

H・G・ウェルズより：ショーの昔の発言はずいぶん論調がちがうぞ！

拝啓 ショー氏に対してこれ以上やり返す気はないが、ショー氏自身がショー氏に対して言っていることを引用すると、読者にはおもしろいのではないだろうか。ジノヴィエフ書簡の頃、彼が固執しているはずのご立派な意見は、『デイリーヘラルド』にこんなことを述べていたのだった。

（前略）イギリス社会主義者の観点からすると、第三インターの連中は、社会主義者としての自分の役目の基本すらわきまえていない。そして現代社会主義についての知識を、書齋にすわって 1848 - 70 年のリベラル改革主義者のパンフレットを読んで得たらしい、一握りの青二オロシア人どもから世界が指図を受けるべきだという提案を聞くと、カーゾン卿やウィンストン・チャーチル氏ですら、極端な現代

主義者に思えてくる。

モスクワが第三インターをせせら笑い、社会主義が死んだ理論ではなく生きた力である場所はすべて、現代科学がモーゼを置き去りにしたのと同じくらい、カール・マルクスをはるかに置き去りにしてきたのだということを認識するまでは、誤解しか生まれようがない。そこではロシアの一握りほどの一番どうでもいいイカレポンチどもが、イギリスの一握りほどの一番どうでもいいイカレポンチどもとやりとりするだけとなり、そのどちらも自分こそはプロレタリアであり革命であり未来でありインターナショナルであり、その他神のみぞ知る様々なものだと妄想するだけなのだ。

私は経験に基づいて語っている。というのもこうした国際的な誤解が生じたのは、これが初めてではないからだ。マルクスの死後長年にわたり、フリードリヒ・エンゲルスはドイツ社会民主党を、本当に有効だったイギリス社会主義者たちから離反させ続けた。それは彼とマルクス、あらゆる独立思想家から最も嫉妬深い孤立の中で暮らす二人が、まさに自分たち自身の作り出した運動から脇に押しやられて取り残されたためだ。リープクネヒトとベーベルが本当の状況に気がつくまでに十年かかった。その状況とは、イギリス社会主義の生きた中心は、フェビアン協会と独立労働党にあるのであって、『共産党宣言』の偉大な枢機卿たちの気の凝りが完全な政治的孤立の中で暮らした郊外のブルジョワ邸宅にあるのではないというものだ。(中略)

ここで最もまともな印象を与えるロシアの著作はトロツキー氏のものだ。だが彼ですら、H・G・ウェルズ氏について、ウェルズ『世界史体系』を読んでおらず、したがってあの本が『資本論』よりどれほど進歩しているかについてまったく見当もついていないことを示すような偏見を持って語っている。

この、見事な文章力と、ブルジョワ幻想からの完全な覚醒が、ロンドン郊外にいたヴィクトリア朝初期の予言者たちに対する、バカのように迷信じみた崇拜と組み合わせられているというロシア的驚異のおかげで、ロシアの革命文書は実に楽しくも絶望的なものになっている。レーニンほど頭も人格も強い人物がこの迷信に絡み取られて身動きできなくなり、ウェルズがモスクワでマルクスの偶像をあざ笑ったら、自由思想家の基本的な批判権を行使しているのではなく、「プチブル」すぎて認識しきれない聖なる偉大さに対して単なる冒瀆を行っているのだと思うしまうようなら、シドニー・ウェップ氏（これまたマルクスのはるか先に進んだイギリス思想家）や、ラムゼイ・マクドナルドや、はたまた自分で言うのもなんだが、この私について、どんな理解が期待できるというのか？（後略）

彼は、自分自身で十分明確に述べているように思う。

H・G・ウェルズ

ショーより：それがどうした！

拝啓 我が友 H・G が、私のあの古い論説を採録してくれたのはありがたい。というのもあれは、現在の議論とはまったく関係ないものの、私が親ロシアコンプレックスも反

ウェルズコンプレックスも持っていないことを如実に証明してくれるものだからだ。

スターリンは、自分やそのボリシェヴストの同輩たちが、工業の「労働者による統制」を試し、民間取引や富農主義を、代わりのものができる前に弾圧することで「段階主義の不可避生」を無視したことで、ひどいしくじりをしでかしたことをまっ先に認めるだろう。要するに、かれらはマルクスの到達点からではなく、シドニーとビアトリス・ウェブの到達点から出発していたなら、NEPにつながった大崩壊を回避して、無駄になったよりひどい数年が節約できたはずだ。だがウェブ夫妻から学ばなかったことを、彼らは苦い経験から学んだ。そして自分たちのまちがい直視を決してためらわなかったし、またそれを一瞬の遅れもなく修正したために、いまや立場は逆転し、聖パスフィールド（訳注：ウェブ夫妻は男爵の称号をもらってパスフィールド卿になった）の次の大著は、イギリスの理論がロシアに何を教えられるかではなく、ロシアの実践が私たちに何を教えてくれるかについてのものとなる。

だから私の古い記事には、今回私が述べたことと整合しない部分は一言もない。昔の記事は古いもので、いま書いているものが最新だ。それだけのこと。

残念ながら、煤煙と白塗りとの間に何も見分けられないような投書子に無駄遣いする暇はない。私は（自分の知る限り）他のだれよりも、マルクスがどこでどうまちがえたかを正確に説明している。煤煙白塗り連中は、批判的分析ができないから、風呂の水と一緒に赤子を捨て、マルクスは騒々しい駄々っ子だと叫ぶことで地球平面論者と同じ水準に即座に下降してしまう。生産手段を「本物の」財産にすることで人間社会に生み出された緊張関係は、私たちの社会階級の間には入り込まず、プロレタリアを結びつけるかわりに分断してしまうために、もっと話がわかるはずの連中（たとえばH・G）はその緊張があることさえ否定する。それは存在するにとどまらず、まさに現在、財産持ちの支配階級を誘惑して、我が国の外交利益に反して日本と手を組んでロシアに対抗させようとすることで、私たちを陥れつつある。そしてそれはさらにマルクスの大いなる一般化が示すように、教科書や小説や想像力の中で各種のロマン主義的で文化的な意匠をまとってきた、多くの歴史的痙攣の説明となっている。ウェルズがスターリンに対し、歴史の鍵となる階級闘争がバカらしさの大爆発だと語って本論に入ったとき、そしてスターリンほどの大人物はそんなゴミクズを受け容れるべきでないと述べたとき、彼は即座の熱烈な反論と反駁に値することを「十分すぎるほど」述べたのだ。これを私は供給したのであり、現時点ではそれに付け加えることは何もない。

だが私がスターリンと同類だからこそ彼のケツをなめていると絶叫し、我が国の政党システム（彼らはこれについて、階級闘争理論と同じくらいわかっていない）が実質的には進歩を不可能にする議会手法なのだと主張するから、私が独裁者を愛しているのだと絶叫する煤煙白塗り連中に対しては、お別れの前に私がルイ・ナポレオン帝国を記憶し、ヴィクトル・ユゴーが海峡諸島から彼に向けた罵倒を放っていたまったくの無意味さも覚えているし、スウィンバーンが彼の追放先の死体に向けて「イヌは死んだ」と叫んだときの無意味さも記憶しているくらいの歳寄りではあるのだ、と思い出させてあげよう。ムッソリーニ、ケマル、ピウスツキ、ヒトラーその他はみんな、私が彼らに対する評価を、実際に実現する成果に基づいて下すことは確信してもらっていい。スウィンバーンのような、安楽なヴィクトリア朝の自由の観念に基づいて評価を下したりはしない。スターリンは十年前には不可能と思われた水準で成果を挙げた。そしてそれに伴い、私は彼に脱帽するのだ。

G・バーナード・ショー

追伸 ウェルズがクレムリンに入ったときの描写として「のこのこ」という用語を撤回することはできない。人間の気分は常にその運動に反映される。ウェルズは闊歩はしなかった。それはあまりに下品すぎる。そしてウェルズは下品ではない。ショー的なやり方で忍び込んだり跳ねたりして灰入ったわけでもない。単に歩いたわけでもない：それには重要人物すぎる。考えられる代替案をすべて消去したら、彼がのこのこ向かったと結論するしかなかった。そうでなければいったい全体どんなふうに向かったというのだろうか？

訳者あとがき

本書は *Shaw-Wells-Keynes on Stalin-Wells-Talk* (1934, *The New Statesman and Nation*, London) の全訳となる。元になったのは、H・G・ウェルズによるスターリンのインタビューだ。そこから派生したいくつかの有名知識人によるコメントと論争を集め、小冊子にまとめたものとなる。

4.7 発端：スターリンとウェルズの対談

大恐慌真っ最中の 1934 年にソ連を訪れたウェルズは、スターリンにインタビューを行い、袋小路の資本主義を脱して社会主義化をすすめるための方策についてスターリンと語り合う。小さな改革の積み重ねや意識の高いインテリの善意による実質的な社会主義実現を訴えるウェルズに対し、スターリンは、小さな改革によるのではない、大規模な武力闘争による体制転覆と権力奪取を、革命に不可欠なこととして主張し、ウェルズを嘲笑する。

スターリンの回答は見事なまでの社会主義の公式見解そのまま。だが、それをきちんと話の文脈に見事におさめる。ニューディール政策についての評価も、うわべにまどわされず、むしろ資本主義の温存のためのものだというケインズ的な評価を下せているのはすごい。一方のウェルズはあらゆる点でやすやすと手玉に取られ、社会主義への道はおろか自国イギリスの歴史や状況についてすらあっさり論破され、フォードやロックフェラーについての評価ですらスターリンにその偏った思いこみをたしなめられる。

これを見ると、H・G・ウェルズってダメじゃん、と思いたくもなる。が、そんなことはないだろう。ただウェルズは明らかに、自分が少なくとも現代資本主義の限界というところでスターリンとは同じ基盤に立っていると思っていて、その部分ではお互いに共感しつつその先の戦術の相違について意見が交わさると思っていたようだ。ところが、スターリンは、ウェルズと多少なりとも共通の基盤なんかがあるとは思っていなかった。ウェルズが戦術としか思っていない部分こそが、スターリンには基盤だった。基本的に、ウェルズはがんばってはいるが、まったく読みが甘かった、ということになる。

そして、ウェルズは（そしてこの論争に参加しているすべての人は）なぜかこれが対等な立場の対談だと思っているけれど、スターリンはそんなことは思っていない。彼にとっては、これはプロパガンダだ。知識人なんてのは、対等な相手ではない。いつも権力に寄生するだけの卑しい下等人種で、使えるときに利用するものでしかない。これは、彼が対談の中で明言していることだ。ウェルズは、自分がその一人だとは思っていなかったけれど、スターリン的にはまさにウェルズは対外的に利用しがいのあるプロパガンダのマウスピースでしかない。そしてここでウェルズは見事なまでに利用されている。その意味で、スターリンのほうが圧倒的に役者がうえだった。

4.8 対談を巡る論争の概要

この対談/インタビューが *The New Statesman and Nation* に掲載されると、大きな話題となったらしい。そして、バーナード・ショーとウェルズを中心に、かなり激しい応酬があった。その議論はどんなものだったのか？ それぞれの簡単な紹介をしておこう。

4.8.1 論争者その1：バーナード・ショー

最初に登場するのはバーナード・ショーだ。バーナード・ショーは高名な戯曲家名で、最も世間的に有名なのは、あの『マイ・フェア・レディ』の原作『ピグマリオン』だろう。また早い時期から社会主義支持者……というより反資本主義者として知られる。というのも、資本主義にさえ反対していれば何でも支持するという、あまり首尾一貫しない人ではあるからだ。社会主義者というより、独裁者好きなのだというケインズの揶揄が正しいのかもしれない。

そのショーは、この対談でスターリンが相手の話をきちんと聞いて、それを受けた回答をしている点をちゃんと読み取っているように見える。ここまではえらい。ウェルズが毎回、その回答に対してまともに反論もできずに話題を変えるしかない様子も見ている。この対談でスターリンがすべてポイントをかせぎ、ウェルズがバカをさらしていると思っている。階級闘争の話やインテリの役割について話すんなら、もっと突っ込みどころがあったことまで指摘している。これもなかなかいい感じ。

が、その表現は、口が悪いと一部では言われるこの訳者ですらひるむものだ。ウェルズの情けなさをかなり意地の悪い辛辣な表現でバカにしてみせる。単なる批判ではない。罵倒して、けなしまくっている。行きがけの駄賃にしてもあまりにひどい。

でもこれだけなら、ショーというのは意地悪で口が過ぎるけれど鋭い人だ、という印象で終わっただろう。ここでやめておけば、ショーはずいぶん株を上げたと思うのだが……

ウェルズがこのかなりひどい罵倒に対して当然ながら気分を害し、ものすごく怒った反論をよこしたのに対し、ショーはさらに攻撃を進め……そしてすさまじい馬脚をあらわす。彼は、スターリンとウェルズの対談だけについて話をしていただけではなかった。彼はスターリンの完全な個人崇拜に陥っていて、ロシアが人民のユートピアを実現し、スターリンは独裁者なんかではなく、その仕組みは経済のあらゆる問題を解決しており云々という、当時の基準からしても正気とは思えない主張をどんどん展開する。スターリンのひどい手口についても、彼は無視するどころか、賞賛する。銃口を後頭部につきつけていろいろやらせるのが、軽い冗談のネタですむ話だと思い、その反対者狩りを、自主的な異端審問官だと誉めそやしてみせる。インタビューに対する最初のコメントは、別にショーがきちんと話を読めていたからではなく、単なるスターリン信者だったただけだ、というのがあらわになる。

そして彼がなにやらえらい剣幕で罵倒を重ね、ウェルズをバカにしていたのも、軽口ではなかった。彼は、ウェルズがスターリン様に対して不敬な物言いをしたとされていて、それで怒っていたのだ！ ウェルズはスターリンに謝れとまで言い出す。結局、ショーはただの善意のバカにすぎないことが、これで露骨に分かってしまう！

さらに最後にウェルズが引用したかつての記事で、彼は自分のことをなぜかすごい社会

主義理論家だと自画自賛する。自分はだれよりも明確にマルクスのまちがいを指摘したのだ、と（失笑）。何でもショーは、スターリンと面会の荣誉に浴したそうなんだが、そのときにスターリンにマルクスのまちがいを指摘してあげたんだろうか？ さらにマルクスやレーニンとはまったくダメだと思っているのに、なぜかスターリンはすばらしく、ついではムッソリーニもヒトラーも結果を出すからよいのだ、というわけのわからんことを言い出す。ケインズは、それをはっきり（だがショーに分からない程度にぼかして）述べ、彼を「非科学的」と嘲笑しているけれど、まあ当然だろう。

4.8.2 論争者その2：H・G・ウェルズ

H・G・ウェルズは、もちろんかの名作「タイムマシン」「透明人間」「モロー博士の島」などの先駆的な名作SFで有名だ。いまのSF作家は、まあこう言うと失礼だが、通俗小説家以上のものではない。でも日本でもかつて小松左京が、単なる作家の枠を超えた一大知識人、文化人だったように（いやその何十倍も）、20世紀初頭のウェルズは、科学の発展が社会に与える影響について真剣に考察している点で余人の追求を許さない知的巨人だった。荒俣宏が書いていたけれど、その博識ぶりと考察の広さや自由さはすさまじく、また日々の勉強もすごくて、彼の家の近くに来ると、ウェルズが成長している音が聞こえるほどだったという。そんな人物だからこそ、スターリンとも対談できたわけだ。ちなみに彼は、革命直後のロシアにもでかけてレーニンと対談し、結構期待しつつも批判的だ（『霧の中のロシア』。ある意味でスターリン対談は、ソ連側にとってそのときの意趣返しとなる）。

さて、ショーの常軌を逸したとすらいえる罵倒に対してウェルズはかなり傷ついて、大いに反論する。スターリンの言ってる階級闘争なんてつまらないしどうでもいい、世界の大いなる技術進化と発展による社会と文化そのものの变化こそが重要なんだ、と述べる。言いたいことはよくわかる。が……

あなた、スターリンとの対談の中で、そんな話は一言もしてないですよねえ。暴力闘争なくても世界は社会主義に向かいます、という話しかしてませんよねえ。彼の言っていることは、基本的にはすべて後出しジャンケンに堕している。そしてそれは、ショーの最初の批判に対する回答には全然なっていない。その後のショーの馬脚を見れば、まあ回答しなくてもよかったか、という気はしないでもないが、それならなおさら、その自分の考える未来像についてスターリンと話をしてほしかった。そしてスターリンがまちがっているというなら、対談の中で多少なりとも彼が言葉に詰まるような突っ込みをしてほしかった。あの対談では、ウェルズは単なるプチブル社会主義者にしか見えないからだ。

そして論争においては、彼は守勢にまわって自己弁護の泣き言に終始して、最後に「これで終わりにする！」と言いつつまたのこのこ出てくるという醜態をさらす。昔からこの手の論争って同じなんですねえ。もうちょっと冷静になれば、ショーのバカさ加減くらい十分見抜けたはずなのに、大変損な役回りになっているのはとても可哀想だ。

4.8.3 論争者その3：ジョン・メイナード・ケインズ

これに対して出てくるのは、大経済学者ジョン・メイナード・ケインズだ。彼はまさにこの論争の時期に生じていた大恐慌と、それに対して無力だった当時の経済学に対して、

まったく新しい経済学の体系、通称ケインズ経済学を考案し、ある意味で世界を救った人物だ。そして彼は、この雑誌の編集長とかなり懇意だったこともあって、ここに引っ張り出されてきたらしい。おそらくは、ショーとウェルズの両方と知り合いだったこともあり、ある程度の仲裁役が期待されていたんじゃないかな。

ケインズは、スターリンとマルクス主義を基本的には否定している。一方、H・G・ウェルズのお友だちで、ショーが嘲笑に持ち出してきたウェルズ『クリソルド』を高く評価する書評も書いている。そしてショーがお調子者のバカなのも知っていて、彼がムッソリーニを絶賛してコミンテルンを批判しつつスターリンを絶賛するなどというわけのわからない思想の持ち主だとやんわり指摘することで、それをさりげなく表現している。ついでに文末で、もう少し言い方何とかならんのか、とショーを揶揄する(が、さすがの彼も、ショーがまさかスターリン崇拝で本気で怒っているなどとは思わなかったはず)。

彼は、ウェルズが頑張っているのだ、と述べる。でもスターリンはそれに聞く耳を持たずプロパガンダをがなりたてるだけだったのがいけないんだ、という。あのインタビューのやりとりだけで見れば、これはあまり妥当とは思えない。スターリンはウェルズの話を引きいて、それに応じた的確な答えを返している。それが公式プロパガンダにしかならないのは事実。でも、それがそもそものスターリンの目的なのですもの。

でも、一歩ひいて、そのスターリンのプロパガンダが正しいか、という話まで考慮すれば、少し様子は変わってくる。彼はショーが、スターリンがまったく新しい思想により経済問題を全部解決したと思っているのに対し、共産主義は社会が変わっているのが見えていないし、スターリンの言っていることは変なので、ウェルズの言うことは一理あるよ、という立場だ。そしてケインズは、後半は社会主義経済そのものの批判を展開する。経済がスターリンの言うとおりに展開しなければいけない理由はないのだ、と。中流サラリーマン(ケインズはここで「プロレタリアートならぬサラリアート」という、とても嫌みな表現を使う)が台頭する社会もあるのだ、と。そして彼は、共産主義がはやるのは経済的に優れているからではなく、むしろ新しい宗教だからなのだ、という話をちょっとする。

結局、ケインズはこの対談そのものについての評価を離れて、共産主義全体についての評価に終始している。それが経済的にはかなり筋悪で、経済をよくしたいならもっと良い方法を自分が編み出せるから待っていると言うんだが、そのもっと良い方法を(まだ)きちんと説明できていないので、なんだかこの時点では主旨がはっきりしない茶々入れに終わっているような、腰の据わらない文章ではある。ケインズ自身、1925年の時点では自分もロシアにでかけ、共産主義はダメだけれど潰れるほどダメではないようだから様子を見よう、と述べている。その後のもっと明解な評価が欲しかったところ。が、まあないものねだり。ただそこでこの論争への貢献がその分だけあいまいになっているのは惜しい。彼はもうちょっと有益なことを言えたはずだとは思う。

4.8.4 論争者その4：エルンスト・トラー

ついでに、エルンスト・トラーはほぼ論外だ。彼はドイツの劇作家だが、ナチスに追われてイギリスからアメリカに亡命した人物で、完全なおめでたい善意のソ連シンパ知識人だ。彼は真面目に、ソ連では高い文化が開花して表現の自由が完全に確保されて、と書いている。そのおめでたさがある種のグロテスクさに達しているのは、彼が1934年のモスクワの劇場で見たというお芝居の話だ。白軍将校を人間的に描いたお芝居というのは、お

そらくミハイル・ブルガーコフ『白衛軍/トゥルビン家の日々』だったはず。あのブルガーコフが、ロシアにおける作家の自由の例示として使われる――もちろん当時のトラーはそんなことは知るよしもないのだけれど、現代のぼく(たち)はそのあまりの皮肉にたじろぐ。彼はこの論争でまったく相手にされていないし、なぜ起用されたのかちょっと不明ではある。たまたま同じ頃にソ連を訪問していたから、だろうか？

4.9 結局まとめと……

論争の常としてももちろん、何か結論が出たわけではない。ショーは、かなりひどい馬脚をあらわしたけれど、まだ社会主義やスターリンの実像がはっきりしていなかった当時は、そうは思われなかったかもしれない。その点はトラーも同じだ。ウェルズは、あまりいいところがないけれど、逆にショーのひどすぎる罵倒で同情票をもらえたかもしれない。ケインズは、両成敗っぽいポーズはしつつ、あたりさわりがなくて、多くの読者にはピンとこなかっただろう。

そしてもちろん、いまのぼくたちには、岡目八目という圧倒的な利点がある。いまにして思えば、みんなスターリンを甘く見過ぎていたし、また彼の蛮行はすでにあらわだったとはいえ、まさかあんなにひどいとは、この当事者たちのだれ一人として想像もしていなかっただろう。スターリンは、何もウソは言っていない。そして、それが今にして思えば、このインタビューの恐さではある。

そして、西側知識人たちは、昔から本当に簡単に社会主義にからめとられるし、それはいまもまったく変わっていない。ショーが語っていたようなアホダラ経は、その後パリ五月革命でも、六十年代安保でも、いまのツイッターいなかたちの間でも、しょっちゅう見かける。ちなみに、バーナード・ショーは反ワクチン論者でもあった。その意味で、反体制を気取る軽薄な論者の一つの典型であり、そうした人々の議論がいまも昔も実は単なる信仰告白以上のものではないことをが如実にわかる文書、とは言えるのかもしれない。

4.10 おまけ

このインタビューは、かつておもしろがって訳したらそれなりに話題になったものだった。その後、いろいろケインズを訳しているときに、別件でケインズの雑文集を見ていたら、なんと彼がこのインタビューにコメントしている、というのを知ってその全文を探してきた。何かまったく知らないことがわかるというわけではない。でも、当時の人があのインタビューをどう受けとったか、ちょっと興味深いところではあるし、まったくちがうルートから同じものにぶちあたるといえるのは、経験上なかなかおもしろいネタが眠っていたりするのだ。それに、あのインタビューだけでもおもしろいので、一冊にまとめておけるのはそれなりに価値があることだとは思う。

なお、表紙に使った絵は、原著の表紙そのものだ。この表紙と文中のカリカチュア画を描いたデヴィッド・ロウは、この本の性質を實に見事にとらえて、この表紙の絵に活かしている。結局これはケインズも含め、みんなスターリンに踊らされているだけなのだ。この1934年の時点では、あの衝撃のモスクワ裁判はまだ先の話。この議論を見てこのイラストを思いついたというのは、なかなか大したものだ。

ただ、ここで使った表紙は少しオマケがある。スターリンの頭に乗った一番右がケイン

ズだが、そこから吹き出しが出ている。「With best Xmas wishes JMK」。ケインズが、サインしてこれをだれかに送ったものらしい。おかげで、オークションでなにやらすさまじい値段がついていたけれど……

そして、そのケインズは、本書で実はさりげなく、すごいことを言っている。

**経済問題は解決がそんなにむずかしくない。
この点については、私に任せてもらえれば、
ちゃんと面倒を見よう。**

すごい。大恐慌で世界経済が混乱して崩壊寸前とすら思われ、共産主義も解決できなかった経済の問題すべてを、自分が全部解決してやる、とケインズはここで宣言している。これを読んだとき、ほとんどの人は単なるおふざけ混じりの戯れ言か、単に経済学者としての自負を表しただけと思っていたことだろう。だからその後の投書で「何もできてないくせにえらそうなこと言うな」と怒られている。ケインズはそれに対しては「まだ説得できてないので、すみませんねえ、もうすぐ説得してすべてが変わるよ」という、これまた当時としてはどこまで本気なのかわからない、えらく強気の回答をしている。

だが、ケインズは完全に本気だった。この時点で既に、彼はきたるべき理論の相当部分を完成させていたのだ。そしてこの二年後の 1936 年に、ケインズはあの『雇用、利子、お金の一般理論』を発表する。そして――人によって評価は異なるけれど――ほぼ完全にここでの公約を果たすことになるのだ。

その意味で、本書は予言的な意味合いも少し持つ。それについては、また拙訳の別の各種本を見てほしい。

なお翻訳は、時事ネタに基づくほのめかしが結構多く、意味がわからない部分もそこそこある。何かお気づきの点があれば、ご一報いただければ幸いだ。随時訂正するので。

2021 年 2 月 9 日

山形浩生 hiyori13@alum.mit.edu